

鈴鹿市人口ビジョン（案）

平成27年12月
鈴 鹿 市

目 次

| | | |
|-----|-----------------------------|----|
| I | はじめに | 1 |
| 1 | 策定の背景 | 1 |
| 2 | 人口ビジョンの位置付けと対象期間 | 2 |
| (1) | 位置付け | 2 |
| (2) | 対象期間 | 2 |
| II | 鈴鹿市における人口の現状分析 | 3 |
| 1 | 鈴鹿市の人口動向分析 | 3 |
| (1) | 総人口の推移と将来推計 | 3 |
| (2) | 年齢別人口の推移と将来推計 | 4 |
| (3) | 人口構造の人口ピラミッドによる比較 | 5 |
| (4) | 出生・死亡、転入・転出の推移 | 7 |
| (5) | 総人口の推移に与えてきた自然増減と社会増減の影響 | 8 |
| (6) | 家族類型別世帯数の推移 | 9 |
| (7) | 年齢別単独世帯数の推移 | 10 |
| 2 | 人口の自然増減に関する要因分析 | 11 |
| (1) | 合計特殊出生率の推移 | 11 |
| (2) | 合計特殊出生率と未婚率の推移 | 12 |
| (3) | 性別・年齢階層別未婚率の推移 | 13 |
| 3 | 人口の社会増減に関する要因分析 | 14 |
| (1) | 最近の年齢階級別の人口移動状況 | 14 |
| (2) | 最近の地域ブロック別の人口移動状況 | 15 |
| (3) | 最近の都道府県別の人口移動状況 | 16 |
| (4) | 最近の県内市町別の人口移動状況 | 17 |
| (5) | 特定年齢階級における地域ブロック別の人口移動状況 | 18 |
| (6) | 性別・年齢階級別に見た5年間の人口移動状況の長期的動向 | 19 |
| III | 人口の将来推計 | 21 |
| 1 | 国の人口推移と長期的な見通し | 21 |
| 2 | 鈴鹿市の将来人口推計 | 22 |
| (1) | パターン別の将来人口推計 | 22 |
| (2) | 人口減少段階の分析 | 24 |
| (3) | パターン別の将来老年人口比率 | 26 |

I はじめに

1 策定の背景

○ まち・ひと・しごと創生法（平成26年法律第136号）制定

<目的>

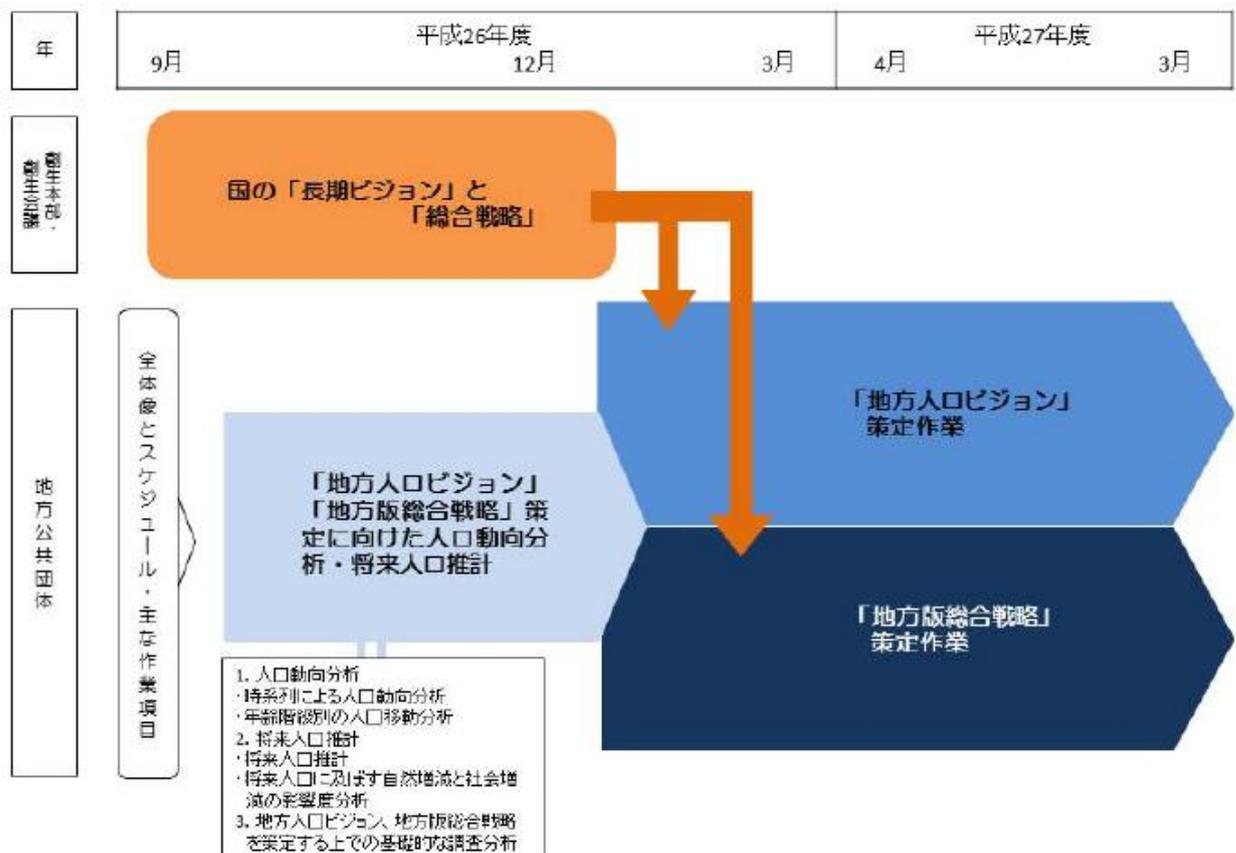
国民一人一人が夢や希望を持ち、潤いのある豊かな生活を安心して営むことができる地域社会を形成すること、地域社会を担う個性豊かで多様な人材について、確保を図ること及び地域における魅力ある多様な就業の機会を創出することの一体的な推進を図る。

○ 法に基づき、次の2点が閣議決定（平成26年12月27日）

- ・人口の現状と将来展望を提示する「まち・ひと・しごと創生長期ビジョン」
- ・今後5年間の政府の施策の方向を提示する「まち・ひと・しごと創生総合戦略」

○ 地方公共団体は、国の長期ビジョン及び総合戦略を勘案し、次の2点の策定に努める。

- ・地方公共団体における人口の現状と将来展望を提示する「地方人口ビジョン」
- ・地域の実情に応じた今後5年間の施策の方向を提示する「市町村まち・ひと・しごと創生総合戦略（地方版 総合戦略）」※まち・ひと・しごと創生法第10条



出典：内閣官房まち・ひと・しごと創生本部事務局提供資料（平成26年10月20日）

2 人口ビジョンの位置付けと対象期間

(1) 位置付け

- 鈴鹿市における人口の将来を分析し、人口に関する地域住民の認識を共有し、今後目指すべき将来の方向と人口の将来展望を提示
- 人口ビジョンは、本市の長期人口フレームを示すものであり、まち・ひと・しごと創生の実現に向けて効果的な施策を企画立案する上での重要な基礎資料

(2) 対象期間

- 国の長期ビジョンの期間（2060（平成72）年）が基本となることから、本市でも同年までの将来人口推計を行うが、中期的（2040（平成52）年）な将来人口推計に重点を置く。

Ⅱ 鈴鹿市における人口の現状分析

1 鈴鹿市の人口動向分析

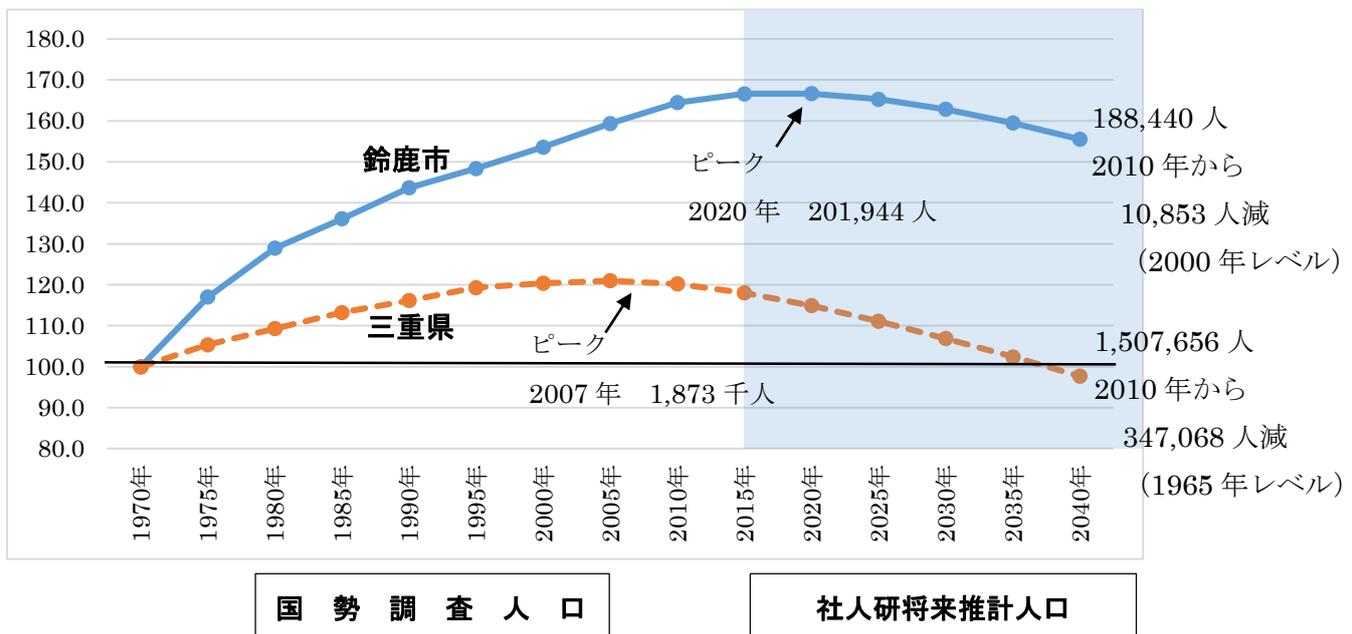
(1) 総人口の推移と将来推計

○ 鈴鹿市における1970年から2010年までの総人口の推移と、国立社会保障・人口問題研究所（以下「社人研」という。）による2015年から2040年までの将来推計を見たのが次のグラフです。

【図表 1-1】

鈴鹿市及び三重県の5年ごとの人口及び将来推計人口の推移

指数(1970年=100)



※2010年までは国勢調査，2015年以降の総人口は社人研推計値から作成

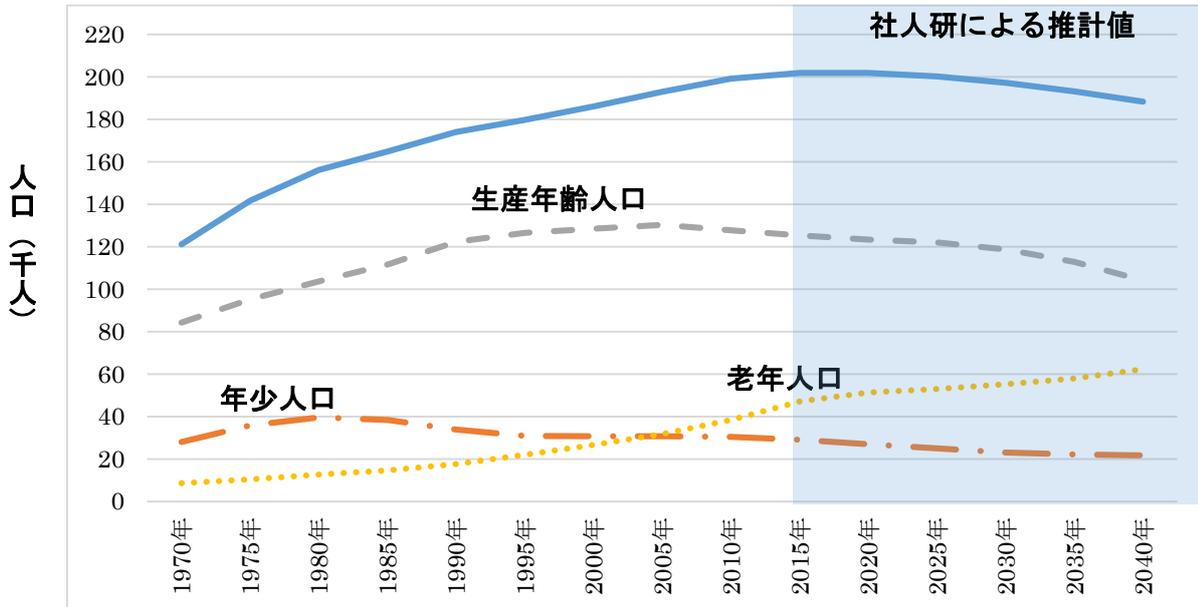
- 鈴鹿市の人口は三重県よりもピークを迎えるのは遅く，その後，減少に転じている。人口の増加率は三重県よりも高い。
- 社人研の推計によると，2040年には鈴鹿市は2000年レベル，三重県は1965年レベルに戻ることになる。

(2) 年齢別人口の推移と将来推計

○ 鈴鹿市における1970年から2010年までの人口及び2015年から2040年までの将来推計人口の推移について、年少人口（0～14歳）、生産年齢人口（15～64歳）、老年人口（65歳以上）の3区分で見たのが次のグラフです。

【図表 1-2】

年齢3区分別人口の推移（鈴鹿市）



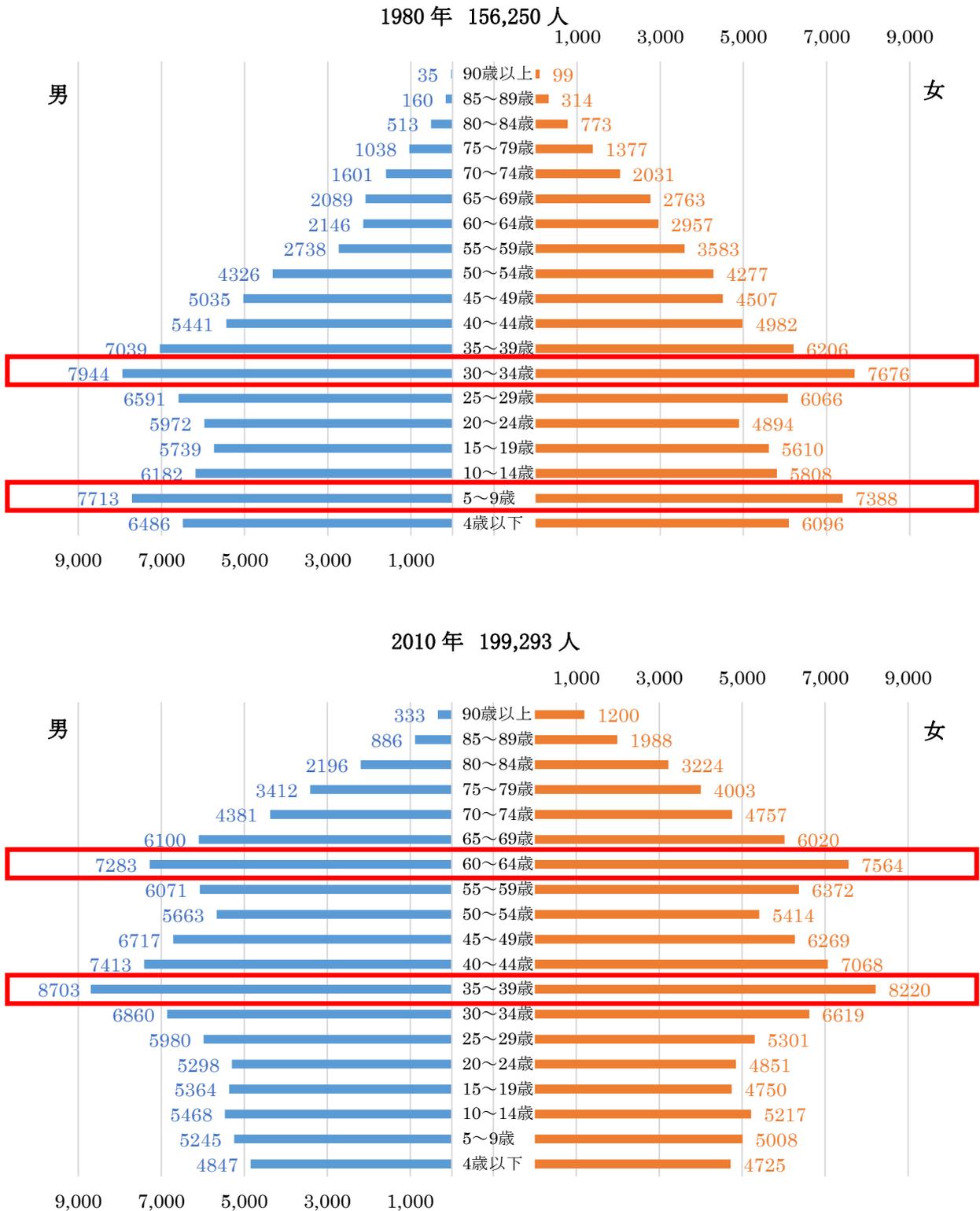
※2010年までの3区分人口は国勢調査，2015年以降の総人口は社人研推計値から作成

- 鈴鹿市では、生産年齢人口が戦後から2000年代半ばまで増加を続けたが、2010年に減少に転じ、現在まで減少が続いている。
- 年少人口は、第2次ベビーブーム時には増加したが、その時期以外は減少傾向が続いている。
- 老年人口は、一貫して増加を続けており、2000年代半ばには年少人口を上回った。

(3) 人口構造の人口ピラミッドによる比較

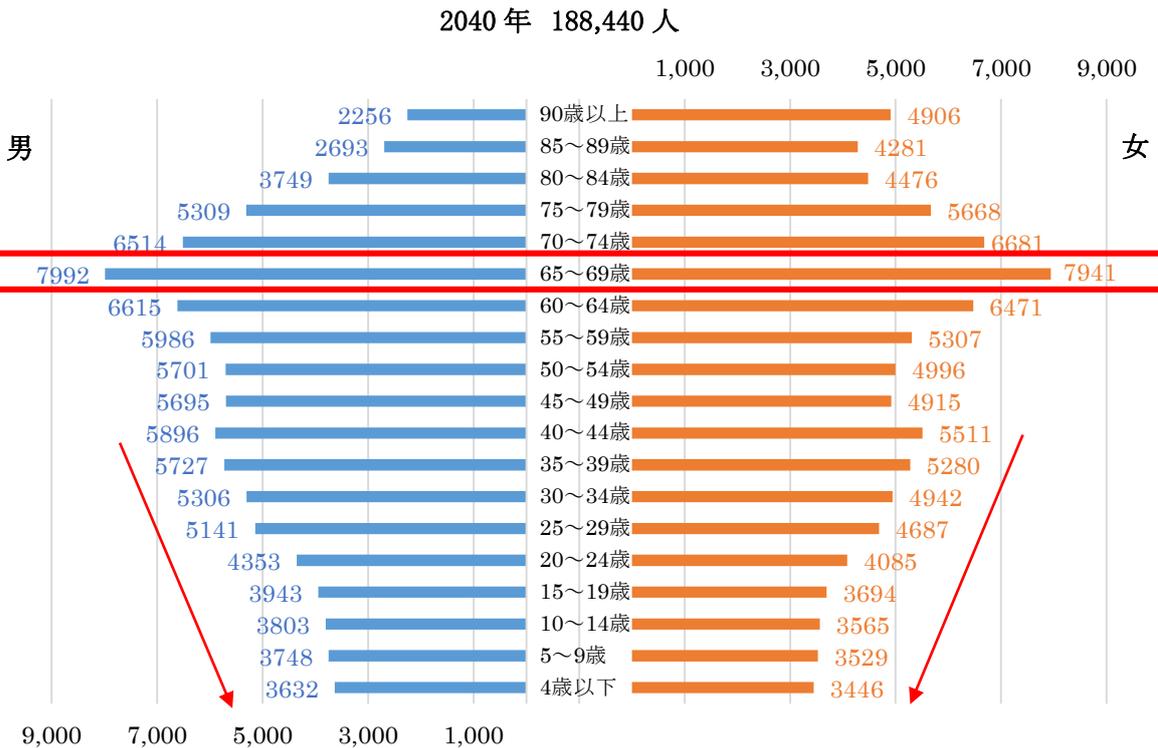
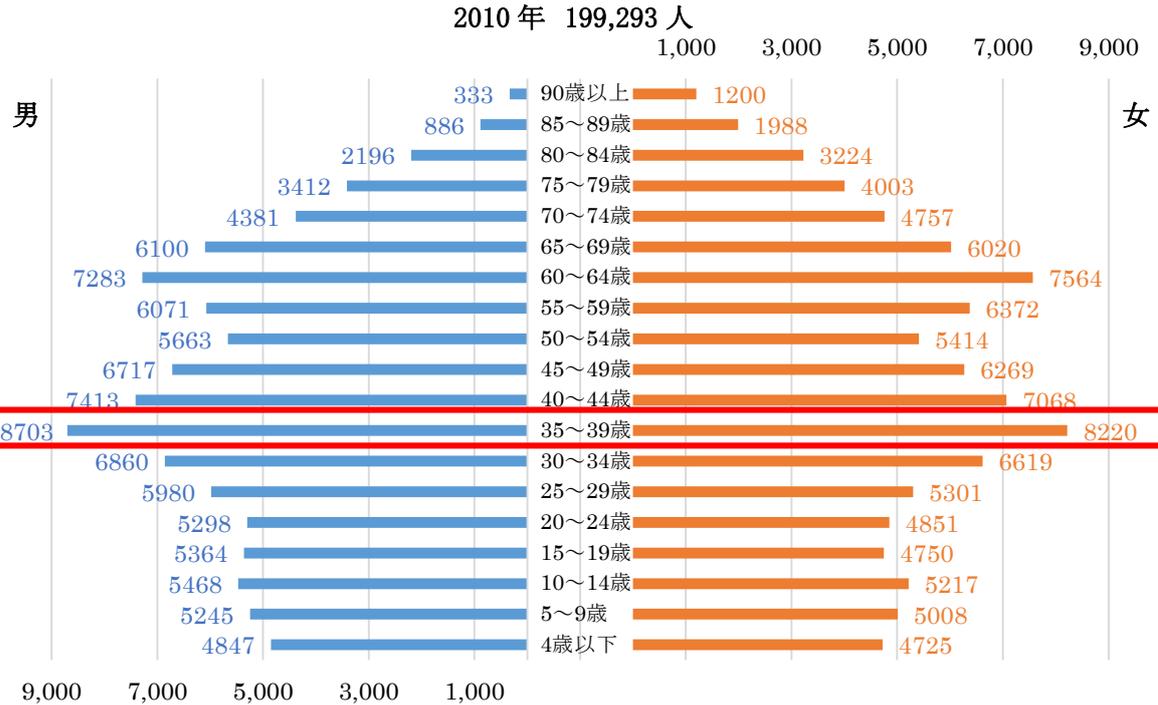
○ 鈴鹿市の2010年の人口と30年前の1980年人口, 及び, 30年後の2040年の将来推計人口について, 人口ピラミッドで比較したのが次の図です。

【図表 1-3】 1980年及び2010年の人口ピラミッド比較 (鈴鹿市)



※1980年及び2010年は国勢調査から作成

【図表 1-4】 2010年及び2040年の人口ピラミッド比較（鈴鹿市）



※2010年は国勢調査，2040年は社人研推計値から作成

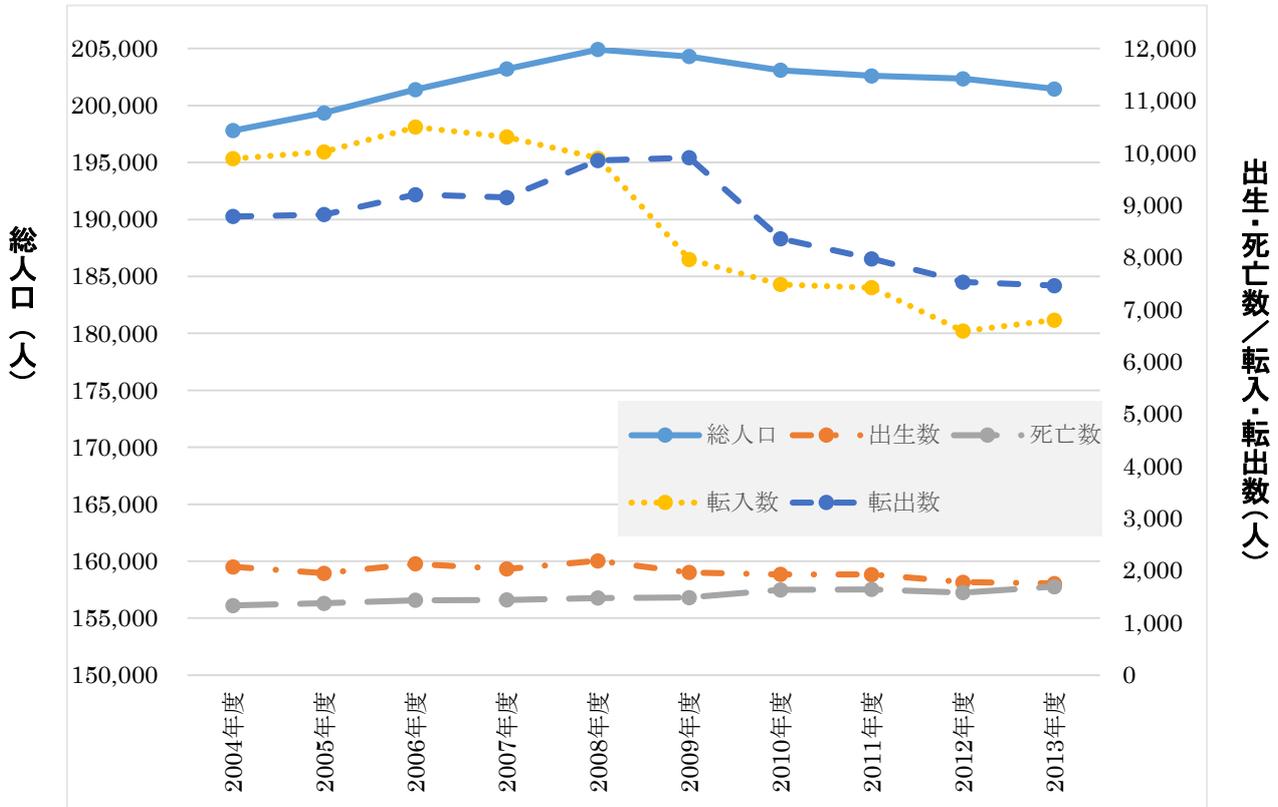
- 1980年以降，出生数の減少傾向から人口ピラミッドが下すぼみの壺型に向かってきた。
- 2010年の団塊ジュニア（35-39歳）が2040年には65歳以上になり，高齢化率が大きく上昇する。
- 2040年の40-44歳以下は年齢が低下することにより減少しているが，推計に基づく部分であり，将来の出生率により変化する。

(4) 出生・死亡、転入・転出の推移

○ 鈴鹿市における2004年度から2013年度の出生・死亡数及び転入・転出数の推移を見たのが次のグラフです。

【図表 1-5】

出生・死亡数、転入・転出数の推移（鈴鹿市）



※住民基本台帳データから作成

※総人口は各年度9月末時点

(総人口とは行政区域内人口のことであり、平成24年7月9日の住民基本台帳制度の一部改正により、外国人住民も住民基本台帳制度の対象)

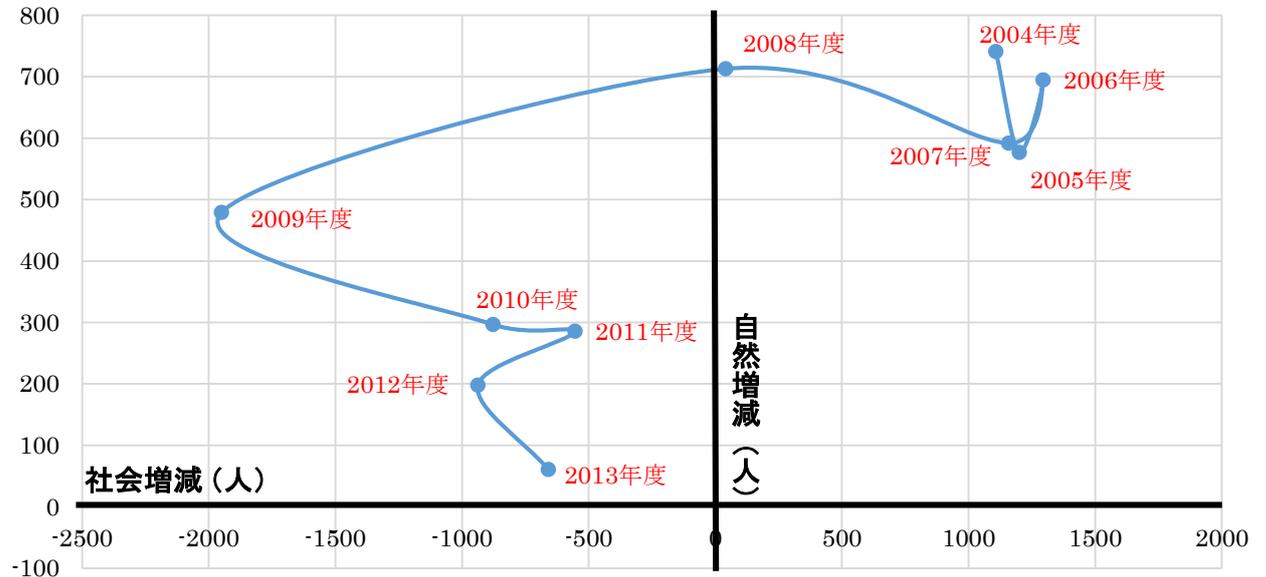
- 鈴鹿市では、「自然増減」については、出生数が死亡数を上回る「自然増」であるが年々、その差は縮小している。
- 「社会増減」については、2008年度まで転入が転出を上回る転入超過（「社会増」）であったが、2009年度からは転出が転入を転出超過（「社会減」）が続いている。
- 外国人人口は、2008（平成20）年10月末の10,491人をピークに減少傾向にあり、2009年度における外国人の転出超過数は約1,400人に上っている。それ以降、数は減少したものの、依然として転出超過の状態が続いている。

(5) 総人口の推移に与えてきた自然増減と社会増減の影響

- 自然増減と社会増減が総人口の推移に与えてきた影響を見たのが次の図で、横軸が社会増減の影響、縦軸が自然増減の影響となります。

【図表 1-6】

総人口に与えてきた自然増減と社会増減の影響（鈴鹿市）



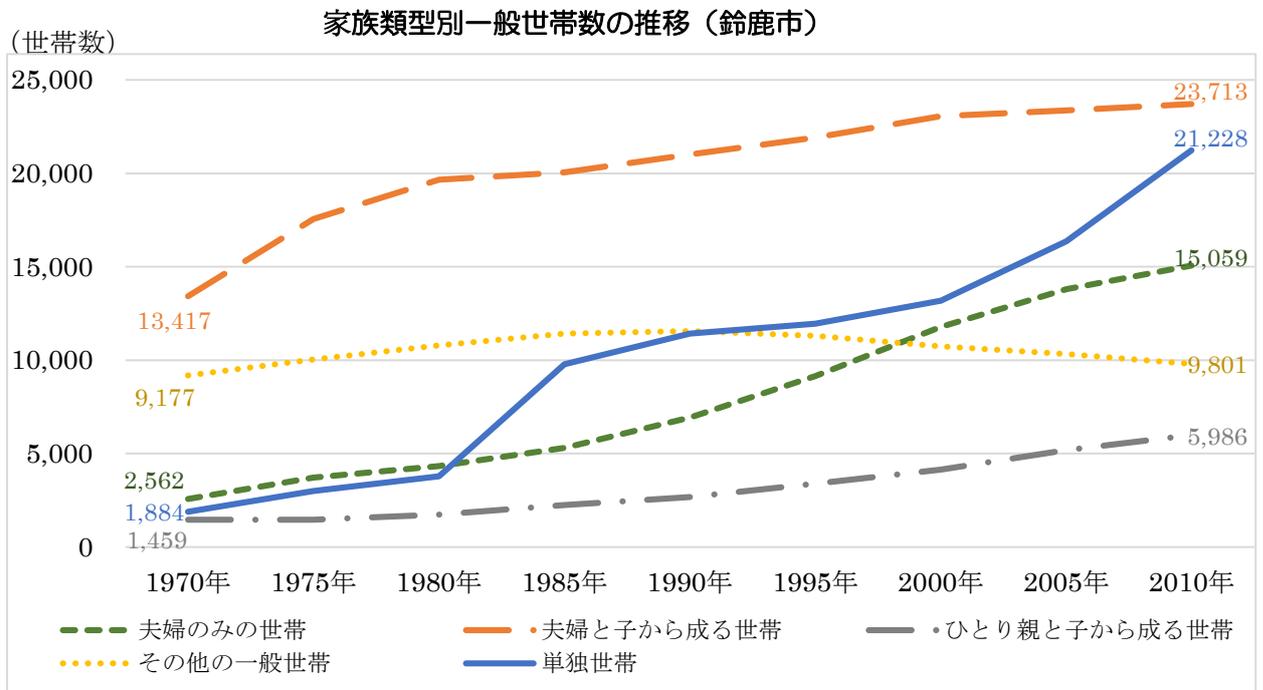
※住民基本台帳データから作成

- 鈴鹿市では、2008年度までは自然増減、社会増減ともに「増加」の状況であったものの、リーマンショックの影響もあり2009年度以降、「社会減」に転じた。
- 2008年度以降、「自然増」であるものの、その増加幅は減少を続けている。

(6) 家族類型別世帯数の推移

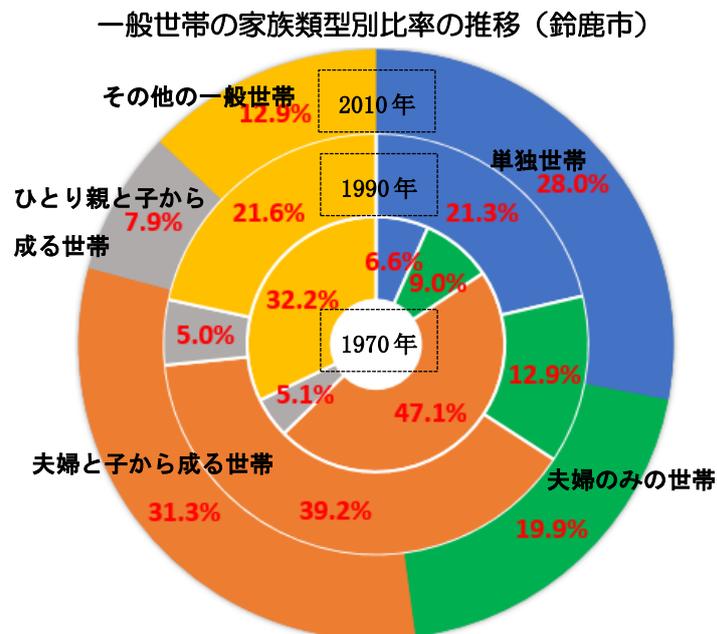
○ 鈴鹿市における1970年から2010年までの家族類型別の世帯数の推移を見たのが、【図表1-7】のグラフで、その比率の推移を見たのが【図表1-8】のグラフです。

【図表 1-7】



※各世帯数は国勢調査から作成

【図表 1-8】



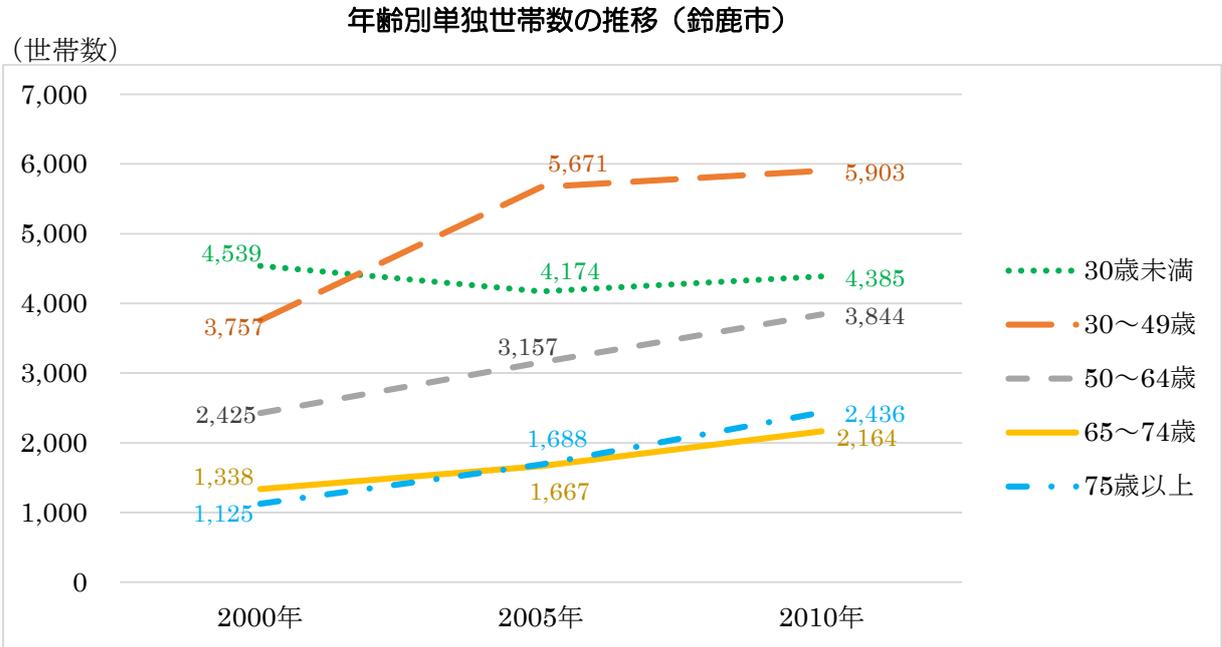
※各世帯数は国勢調査から作成

- 夫婦と子から成る世帯の全体に占める割合が減少に転じる中、単独世帯は、1970年では6.6%であったが、2010年には28%と大きく増加している。
- また、夫婦のみの世帯も全体に占める割合が増加傾向にある。

(7) 年齢別単独世帯数の推移

○ 鈴鹿市における2000年から2010年までの単独世帯数の推移について、年齢別に見たのが次のグラフです。

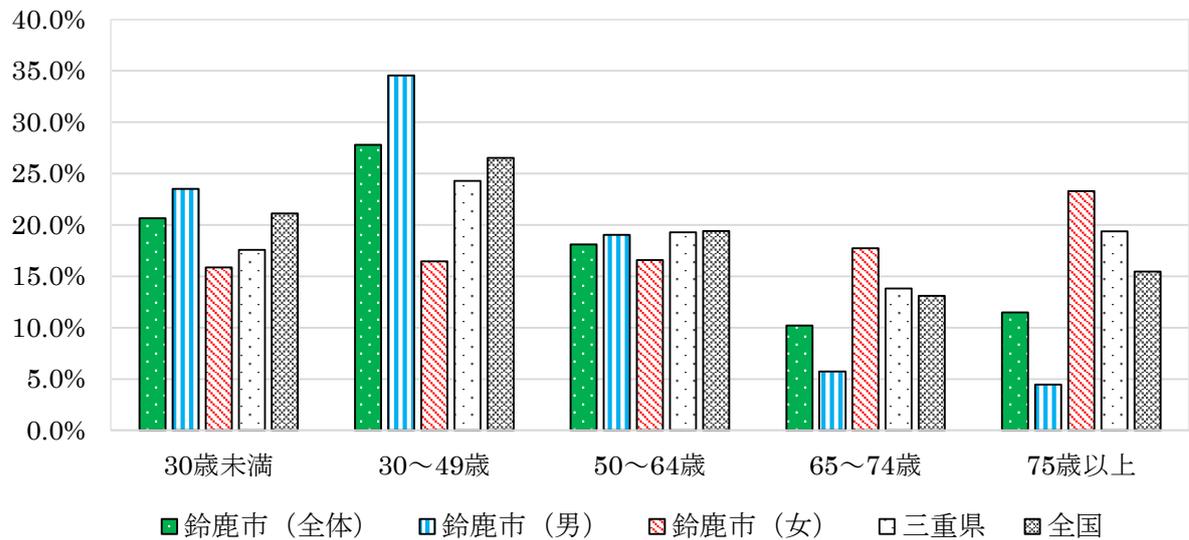
【図表 1-9】



※世帯数は国勢調査から作成

【図表 1-10】

2010年 単独世帯総数に占める年齢別比率の比較（全国・三重県・鈴鹿市）



※世帯数は国勢調査から作成

※単独世帯総数には年齢不詳分を含むため、年齢別比率の合計は100%にならない。

- 30歳以上の単独世帯は、いずれの年代も増加傾向にある。
- 2010年においては、男性では50歳以下の年代で、女性では65歳以上の年代で単独世帯総数に占める割合が高い傾向にある。

2 人口の自然増減に関する要因分析

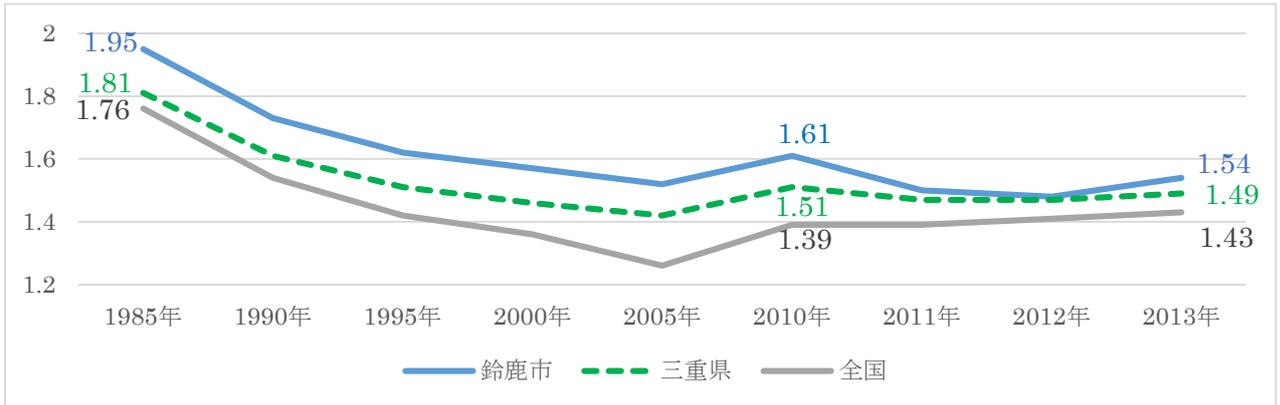
(1) 合計特殊出生率の推移

○ 1985年から2013年までの合計特殊出生率の推移について、全国・三重県・鈴鹿市の推移を見たのが【図表2-1】のグラフです。

また、全国・全都道府県・鈴鹿市の2013年の合計特殊出生率について率が高い順に並べたのが【図表2-2】のグラフです。

【図表 2-1】

合計特殊出生率の推移（全国・三重県・鈴鹿市）



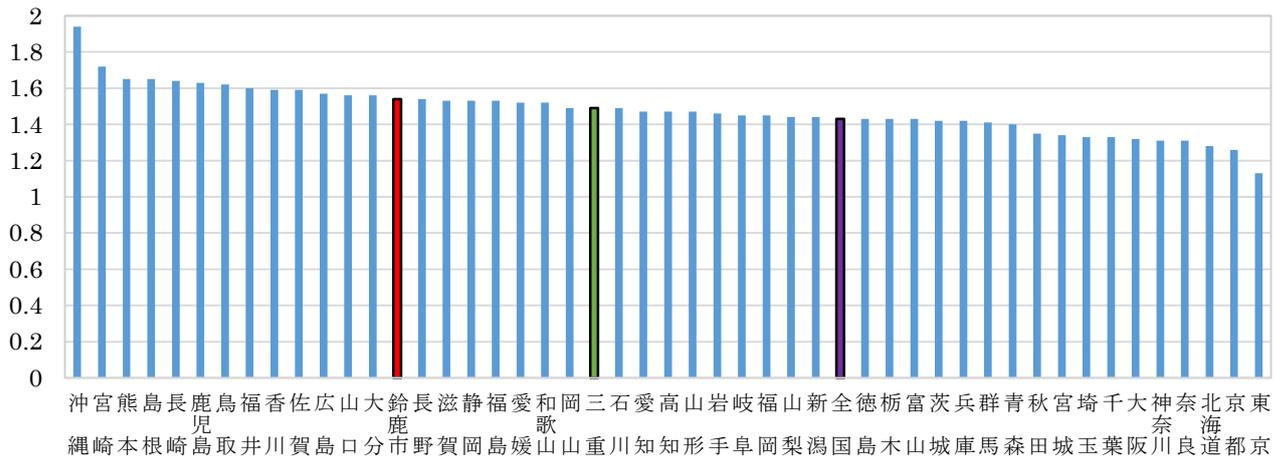
※全国の合計特殊出生率は、厚生労働省「人口動態統計」から作成

※三重県・鈴鹿市の合計特殊出生率は、国勢調査の各年（1985、1990、1995、2000、2005、2010）を中心とした5年間のデータをもとに小地域における推定に有力な手法であるベイズ推定を用いている。

なお、2011年以降の合計特殊出生率は、三重県鈴鹿保健所「保健所年報」から作成

【図表 2-2】

2013年 合計特殊出生率（全国・全都道府県・鈴鹿市）



※全国の合計特殊出生率は、厚生労働省「人口動態統計」から作成

※三重県・鈴鹿市の合計特殊出生率は、三重県鈴鹿保健所「保健所年報」から作成

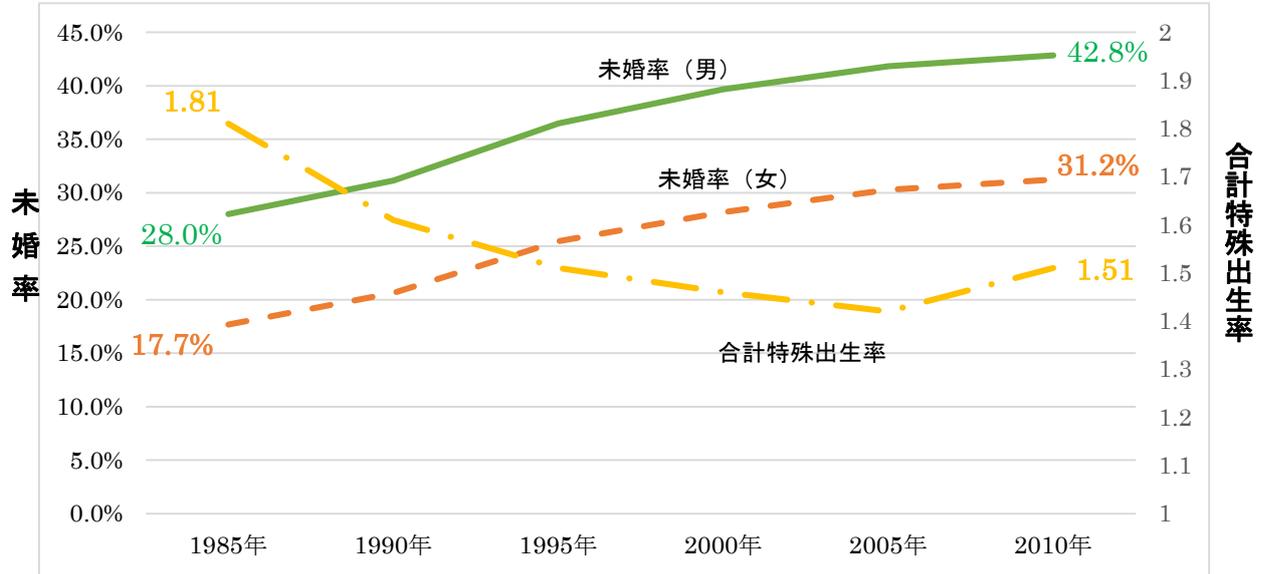
- 全国的に合計特殊出生率は1965年から低下を続けてきたが、2005年を底に上昇に転じている。
- 鈴鹿市では全国を上回って推移しており、2013年は1.54で三重県平均より0.05ポイント高く、都道府県別で見ると全国14位。

(2) 合計特殊出生率と未婚率の推移

○ 1985年から2010年までの三重県及び鈴鹿市の合計特殊出生率、20～49歳男女の未婚率の推移を見たのが次のグラフです。

【図表 2-3】

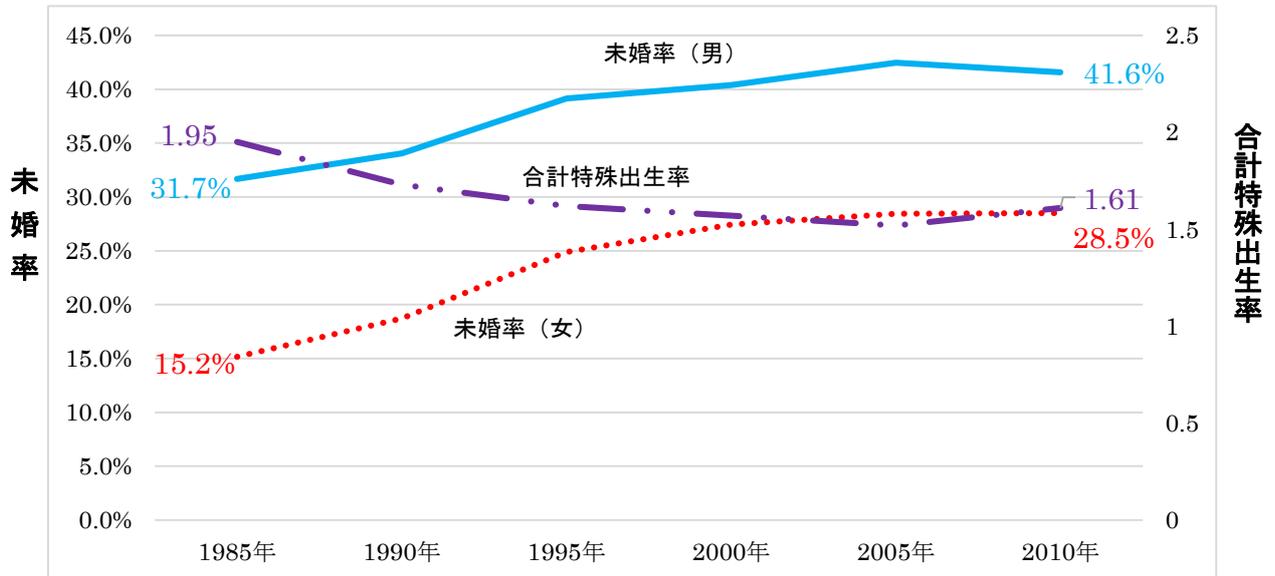
合計特殊出生率と未婚率（20-49歳）の推移（三重県）



※未婚率は国勢調査から作成

【図表 2-4】

合計特殊出生率と未婚率（20-49歳）の推移（鈴鹿市）



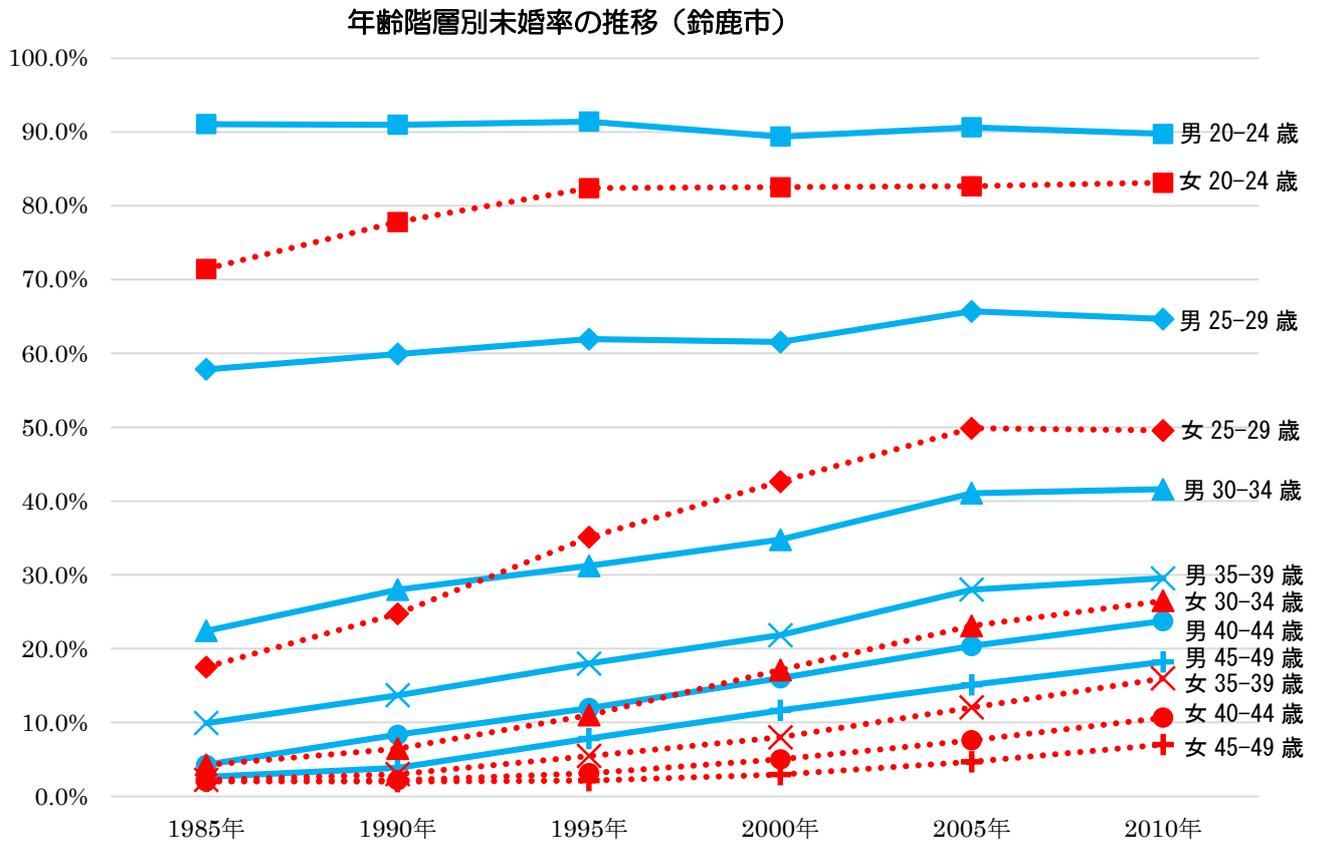
※未婚率は国勢調査から作成

- 未婚率について、三重県・鈴鹿市、男女ともに上昇傾向している。
- 特に、男性の未婚率は高く、2010年には、20-49歳の年齢では三重県では42.8%、鈴鹿市では41.6%といずれも40%を超え、5人に2人は未婚の状況にある。

(3) 性別・年齢階層別未婚率の推移

○ 1985年から2010年までの国勢調査による男女別、年齢階層別の未婚率の推移を見たのが次のグラフです。

【図表 2-5】



※未婚率は国勢調査から作成

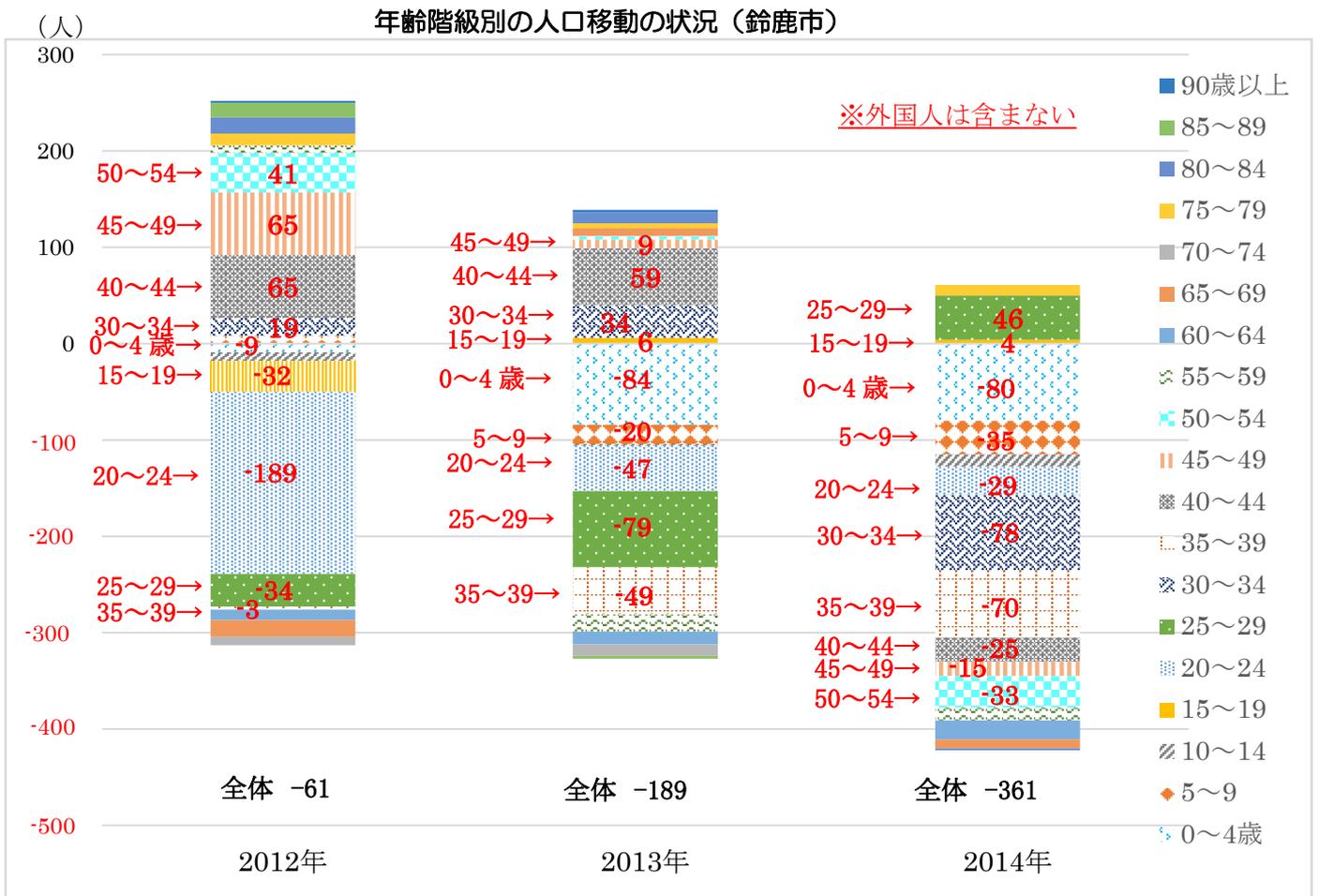
- 未婚率は1985年以降、25～29歳及び30～34歳の女性、30～34歳及び35～39歳の男性で急激な上昇が始まっている。
- 特に25～29歳の女性で見ると、1985年には17.5%だったものが2010年には49.6%と30%弱伸ばしている。

3 人口の社会増減に関する要因分析

(1) 最近の年齢階級別の人口移動状況

○ 2012年から2014年までの人口移動について、年齢階級別に見たのが次のグラフです。原点(0)から上が転入超過、下が転出超過となっています。

【図表 3-1】



※「住民基本台帳人口移動報告」（総務省統計局）から作成

- 鈴鹿市では、2009年度以降、転出超過（「社会減」）傾向となっており、年々、転出超過数が大きくなっている。
- 年によって差は見られるが、15～39歳の世代では転出超過の傾向があり大学等への進学時や就職時の転出が背景にあると考えられる。また、2014年には40代・50代の世代の転出超過が現れている。
- 0～9歳の転出超過も大きく、若い世代の夫婦の転出に伴うものであると考えられる。

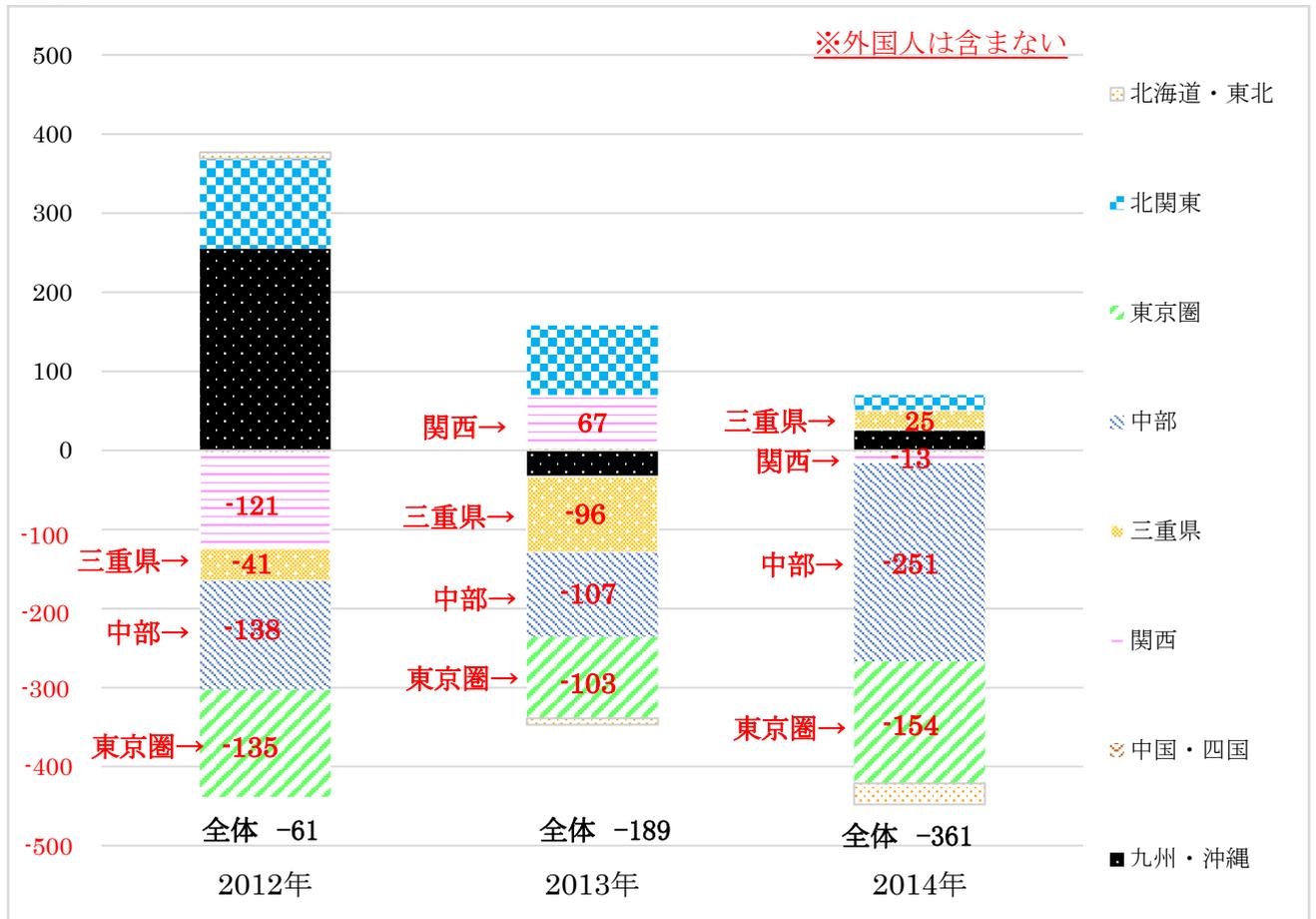
(2) 最近の地域ブロック別の人口移動状況

○ 2012年から2014年までの人口移動について、地域ブロック別に見たのが次のグラフです。原点(0)から上が転入超過、下が転出超過となっています。

【図表 3-2】

(人)

地域ブロック別の人口移動の状況(鈴鹿市)



※「住民基本台帳人口移動報告」(総務省統計局)から作成

■地域ブロックの区分は下記のとおり。

北海道・東北： 北海道，青森，岩手，宮城，秋田，山形，福島

北関東： 茨城，栃木，群馬

東京圏： 埼玉，千葉，東京，神奈川

中部： 新潟，富山，石川，福井，山梨，長野，岐阜，静岡，愛知

関西： 三重，滋賀，京都，大阪，兵庫，奈良，和歌山

中国： 鳥取，島根，岡山，広島，山口

四国： 徳島，香川，愛媛，高知

九州・沖縄： 福岡，佐賀，長崎，熊本，大分，宮崎，鹿児島，沖縄

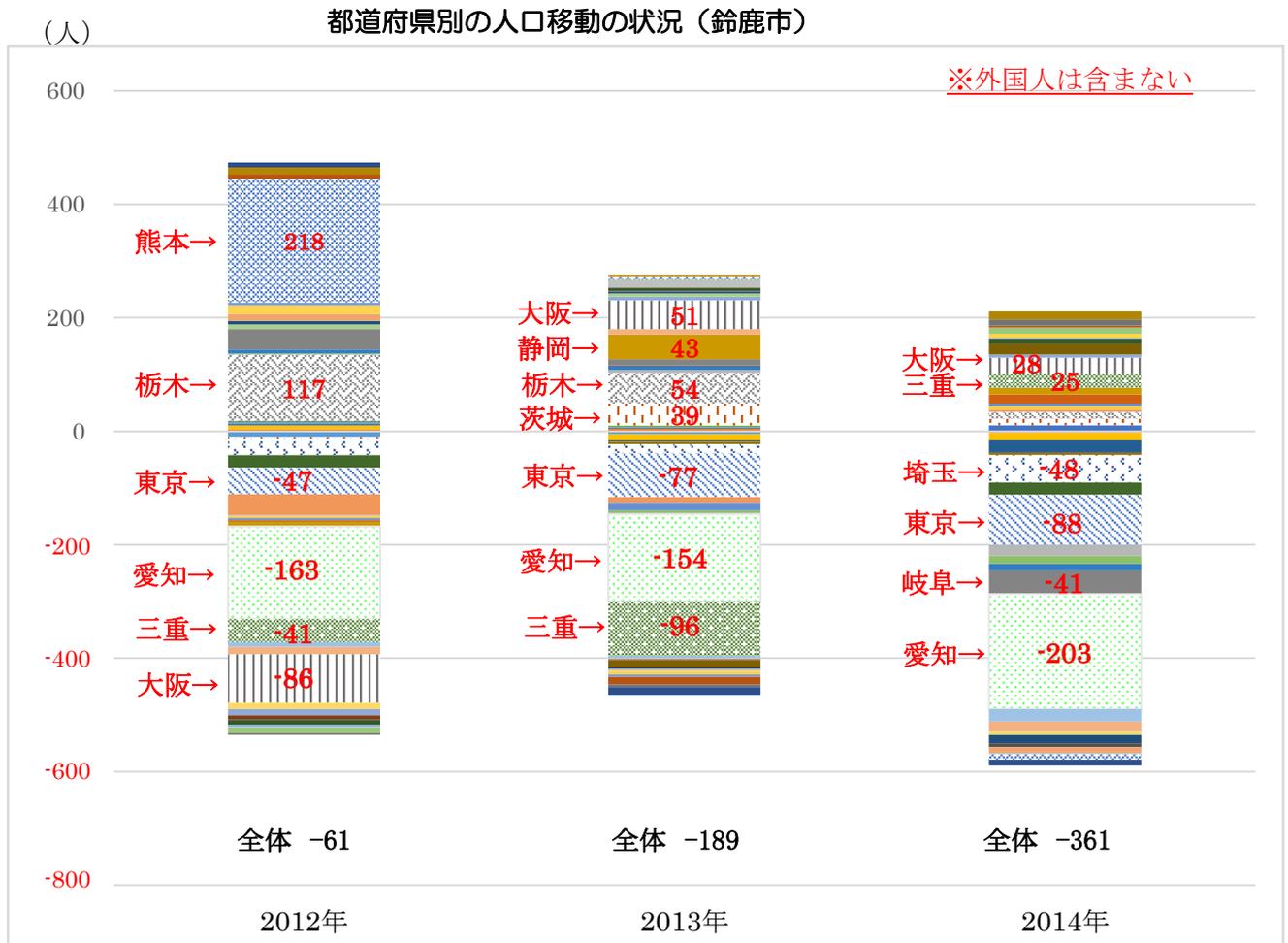
※上記グラフでは、関西ブロックから三重県を抜き出した上で集計をしている。

- 鈴鹿市からは、東京圏，中部圏に対して大きく転出超過となっている。
- 2012年に比べ、2013年には東京圏，中部圏に対しての転出超過は小さくなったが、2014年には一転し、転出超過数は拡大している。
- 2012年及び2013年には転出超過となっていた県内他市町への移動が、2014年には転入超過に転じた。

(3) 最近の都道府県別の人口移動状況

○ 2012年から2014年までの人口移動について、都道府県別に見たのが次のグラフです。原点(0)から上が転入超過、下が転出超過となっています。

【図表 3-3】



※「住民基本台帳人口移動報告」（総務省統計局）から作成

- 2012年から2014年の3カ年の傾向では、東京圏を代表する東京都、中部圏を代表する愛知県に対して転出超過となっている。

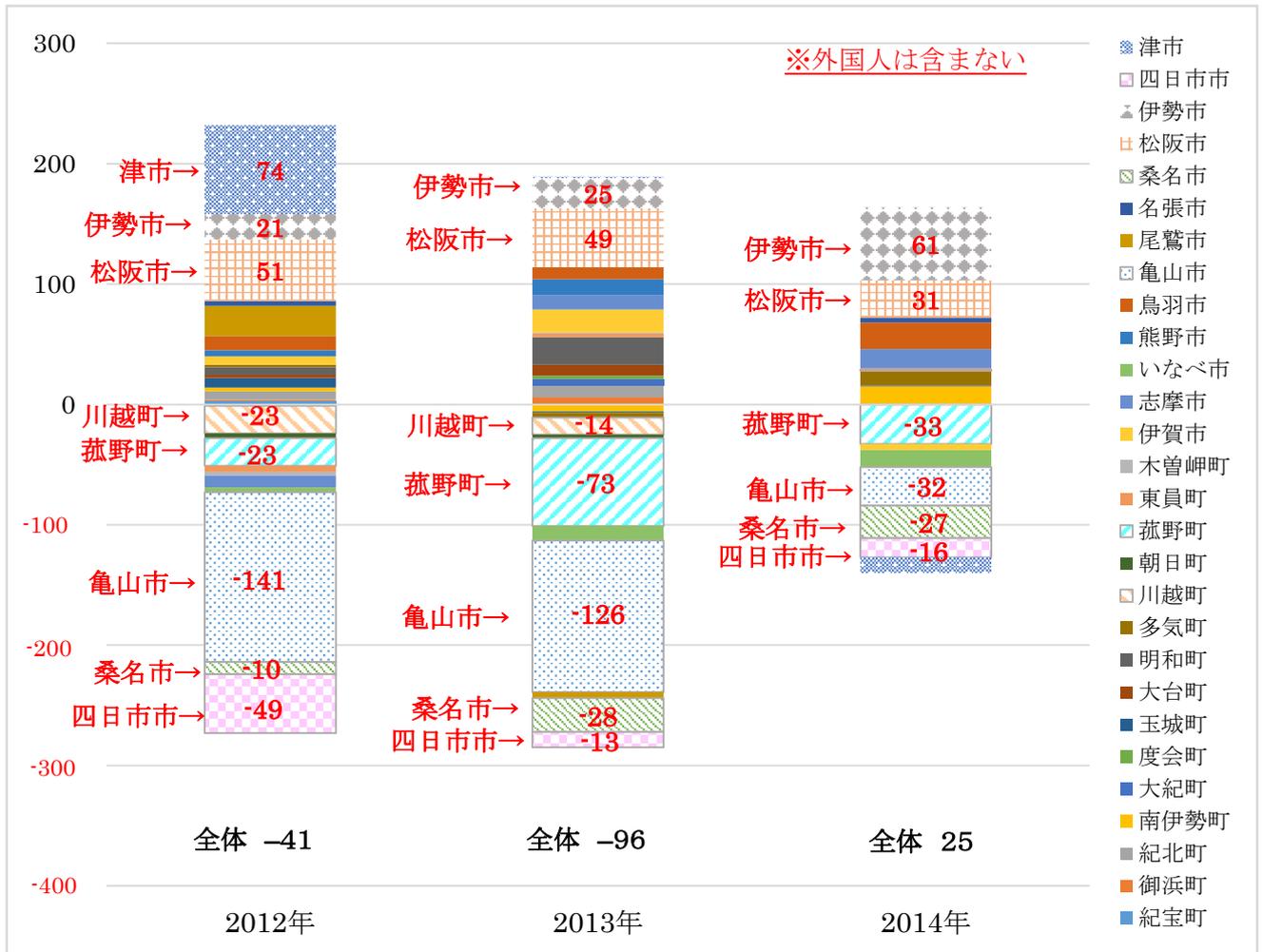
(4) 最近の県内市町別の人口移動状況

○ 2012年から2014年までの人口移動について、県内市町別に見たのが次のグラフです。原点(0)から上が転入超過、下が転出超過となっています。

【図表 3-4】

県内市町別の人口移動の状況(鈴鹿市)

(人)



※「住民基本台帳人口移動報告」(総務省統計局)から作成

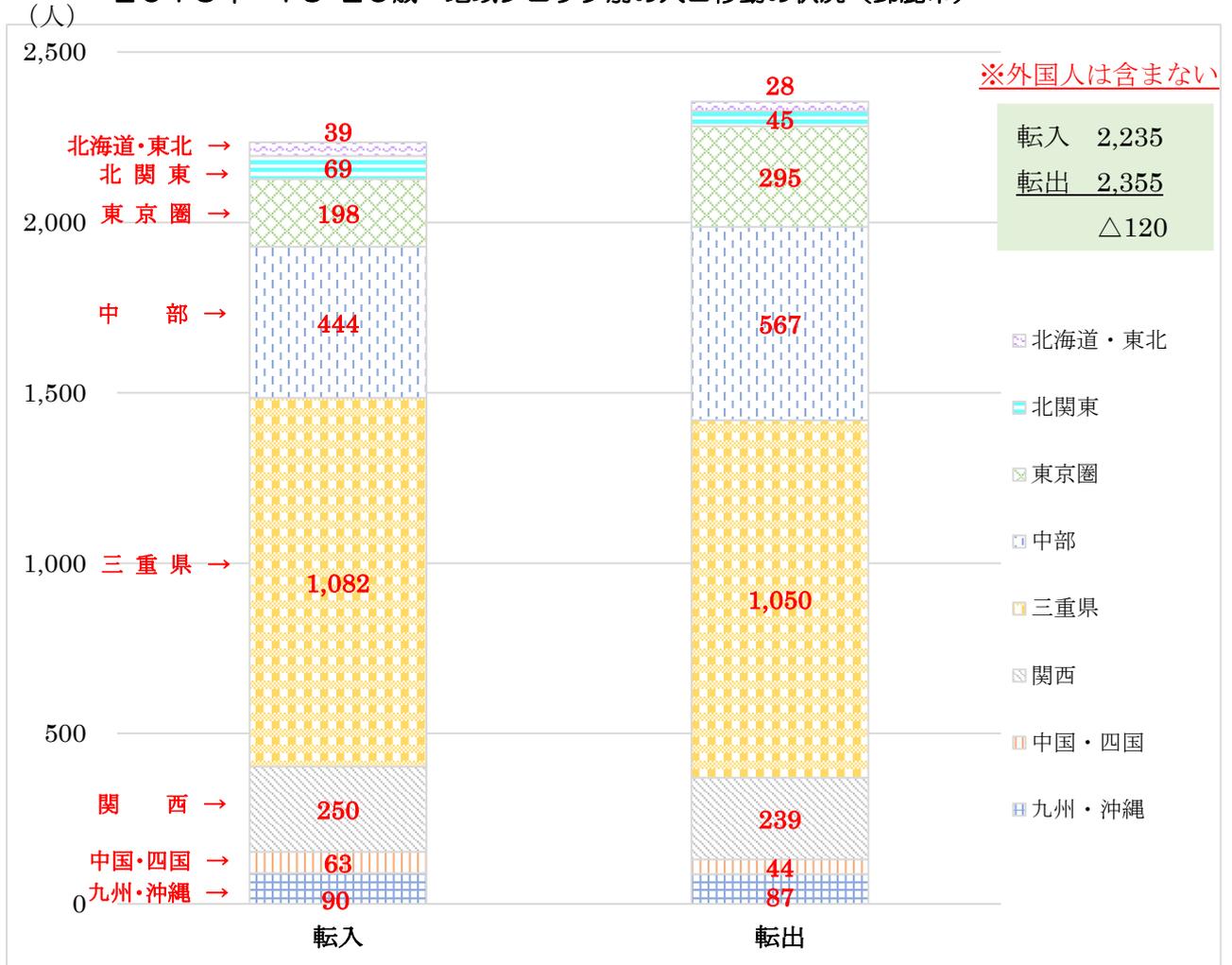
- 2012年及び2013年には転出超過であったが、2014年には転入超過に転じた。
- 2012年から2014年の3カ年の傾向では、転出超過にある市町は同じ傾向にあり、亀山市・菰野町への転出数の占める割合は高い傾向にある。

(5) 特定年齢階級における地域ブロック別の人口移動状況

○ 特定の年齢階層（15～29歳）における2013年の人口移動について、地域ブロック別に見たのが次のグラフです。

【図表 3-5】

2013年 15-29歳・地域ブロック別の人口移動の状況（鈴鹿市）



※「住民基本台帳人口移動報告」（総務省統計局）から作成

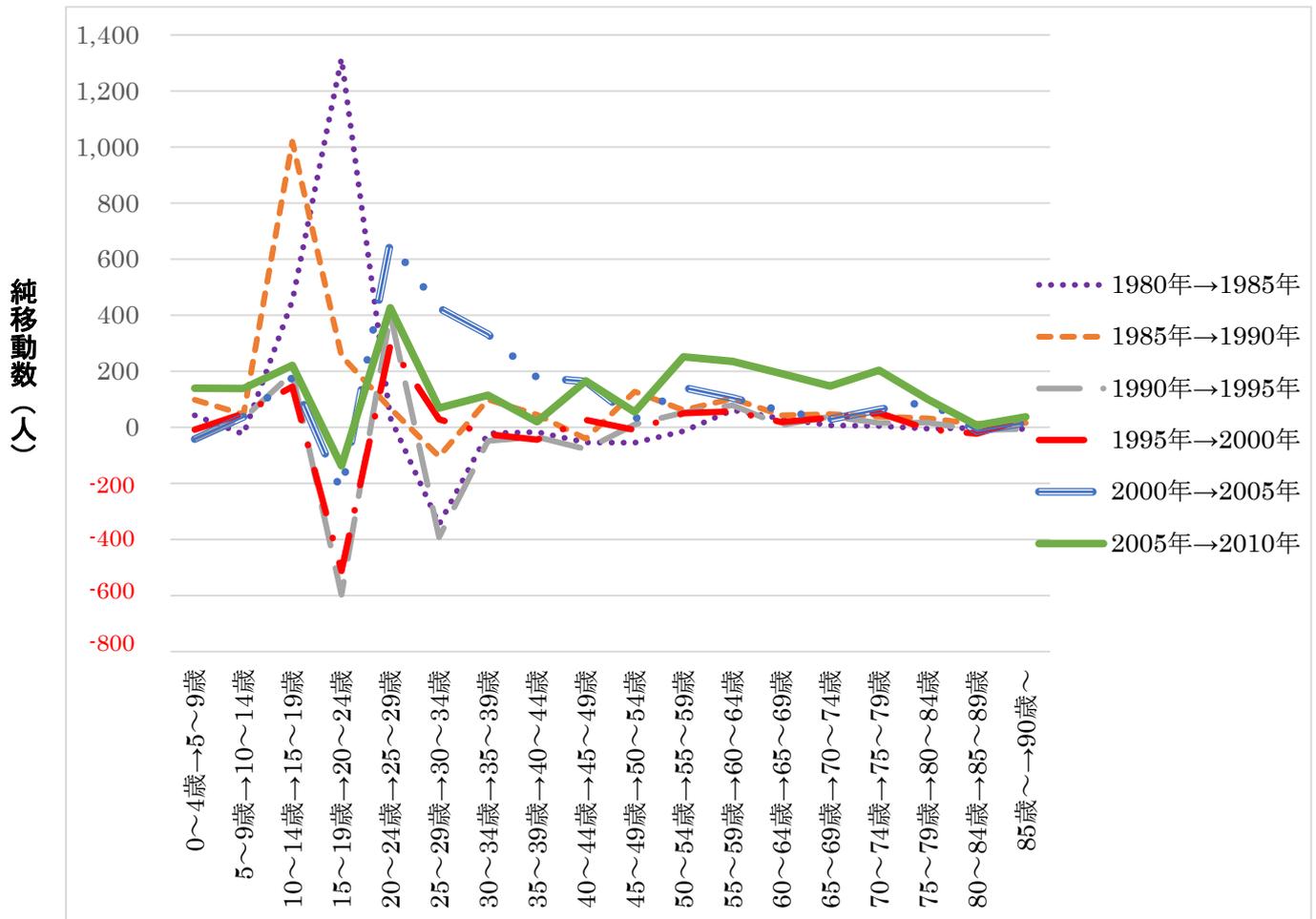
- 15～29歳の若年層は、進学・就職等のライフステージにおけるタイミングで転出超過の傾向が強いが、2013年においては特に東京圏・中部圏でそれぞれ100人程度の転出超過となっている。
- 2013年においては、東京圏・中部圏以外の地域では、転入超過（転出≦転入）の状態となっている。

(6) 性別・年齢階級別に見た5年間の人口移動状況の長期的動向

○ 1980年→1985年から最近年までの推移は次のグラフのとおりとなっています。

【図表 3-6】

年齢階級別5年間の人口移動の推移（鈴鹿市男性）

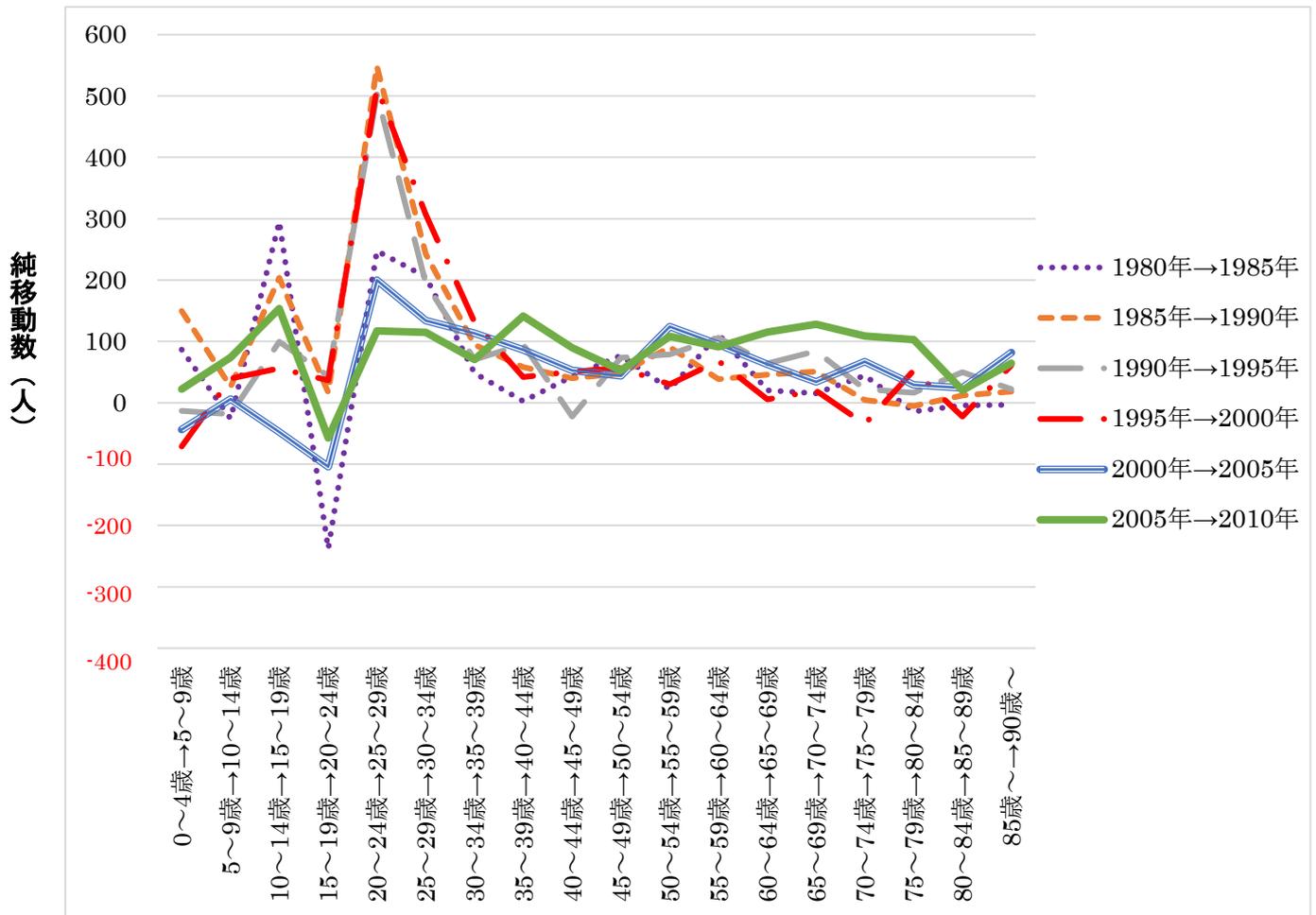


※総務省「国勢調査」データに基づく総務省による推計値

- 1990年以前は、就職・進学のと時期に当たる10～14歳→15～19歳及び15～19歳→20～24歳に大きく転入超過となっていた。
- 1990年以降は、15～19歳→20～24歳に転出超過となっている一方、Uターンの時期である20～24歳→25～29歳の転入超過が大きい。
- また、2000年以降は、50歳以降の転入超過が増加している。

【図表 3-8】

年齢階級別5年間の人口移動の推移（鈴鹿市女性）



※総務省「国勢調査」データに基づく総務省による推計値

- 1990年以降は、進学・就職の時期に当たる15～19歳→20～24歳に転出超過となっている。
- 1985年以降、20～24歳→25～29歳に大きく転入超過となっていたが、2000年以降、その傾向は小さくなっている。

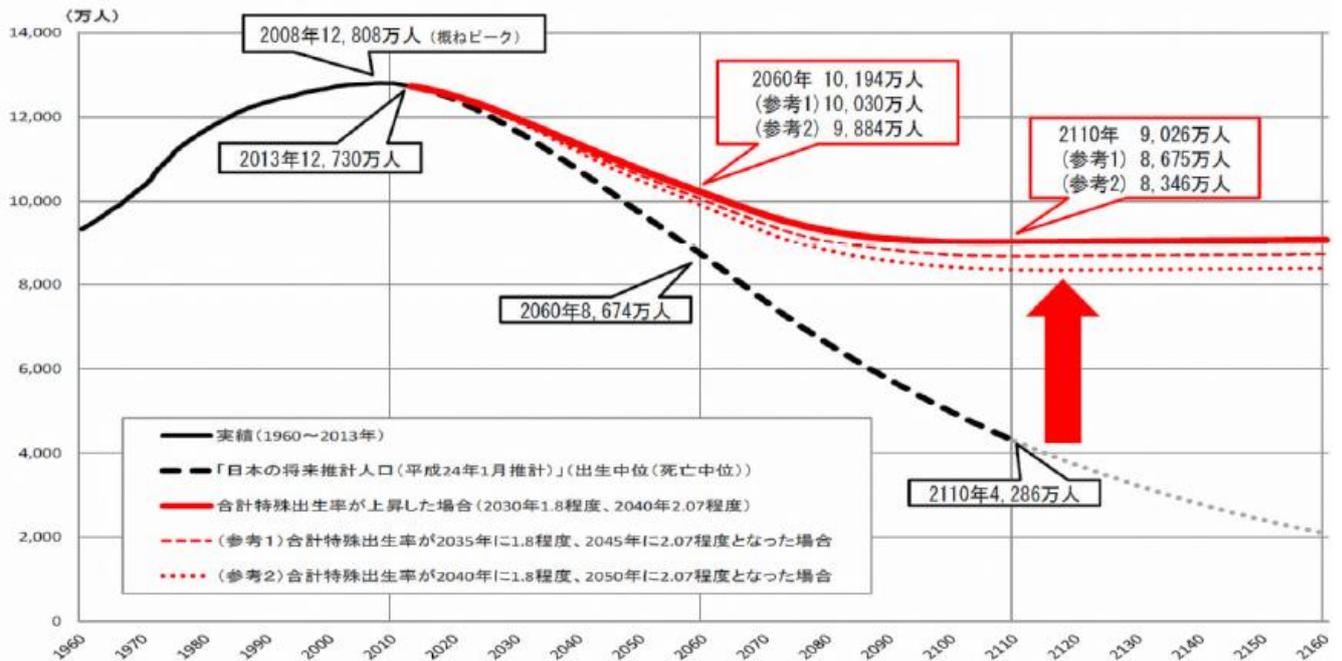
Ⅲ 人口の将来推計

1 国の人口推移と長期的な見通し

○ 社人研「日本の将来推計人口（平成24年1月推計）」（出生中位（死亡中位））をもとに、国の人口推移と長期的な見通しについて示したのが次のグラフです。

【図表 1-1】

我が国の人口の推移と長期的な見通し



(注1)実績は、総務省統計局「国勢調査」等による(各年10月1日現在の人口)。国立社会保障・人口問題研究所「日本の将来推計人口(平成24年1月推計)」は出生中位(死亡中位)の仮定による。2110～2160年の点線は2110年までの仮定等をもとに、まち・ひと・しごと創生本部事務局において機械的に延長したものである。
(注2)「合計特殊出生率が上昇した場合」は、経済財政諮問会議専門調査会「選択する未来」委員会における人口の将来推計を参考にしながら、合計特殊出生率が2030年に1.8程度、2040年に2.07程度(2020年には1.6程度)となった場合について、まち・ひと・しごと創生本部事務局において推計を行ったものである。

- 社人研「日本の将来推計人口（平成24年1月推計）」（出生中位（死亡中位））によると、2060年の総人口は約8,700万人まで減少すると見通されている。
- 仮に、合計特殊出生率が2030年に1.8程度、2040年に2.07程度（2020年には1.6程度）まで上昇すると、2060年の人口は約1億200万人となり、長期的には9,000万人程度でおおむね安定的に推移するものと推計される。
- なお、仮に、合計特殊出生率が1.8や2.07となる年次が5年ずつ遅くなると、将来の定常人口が概ね300万人程度少なくなると推計される。

2 鈴鹿市の将来人口推計

(1) パターン別の将来人口推計

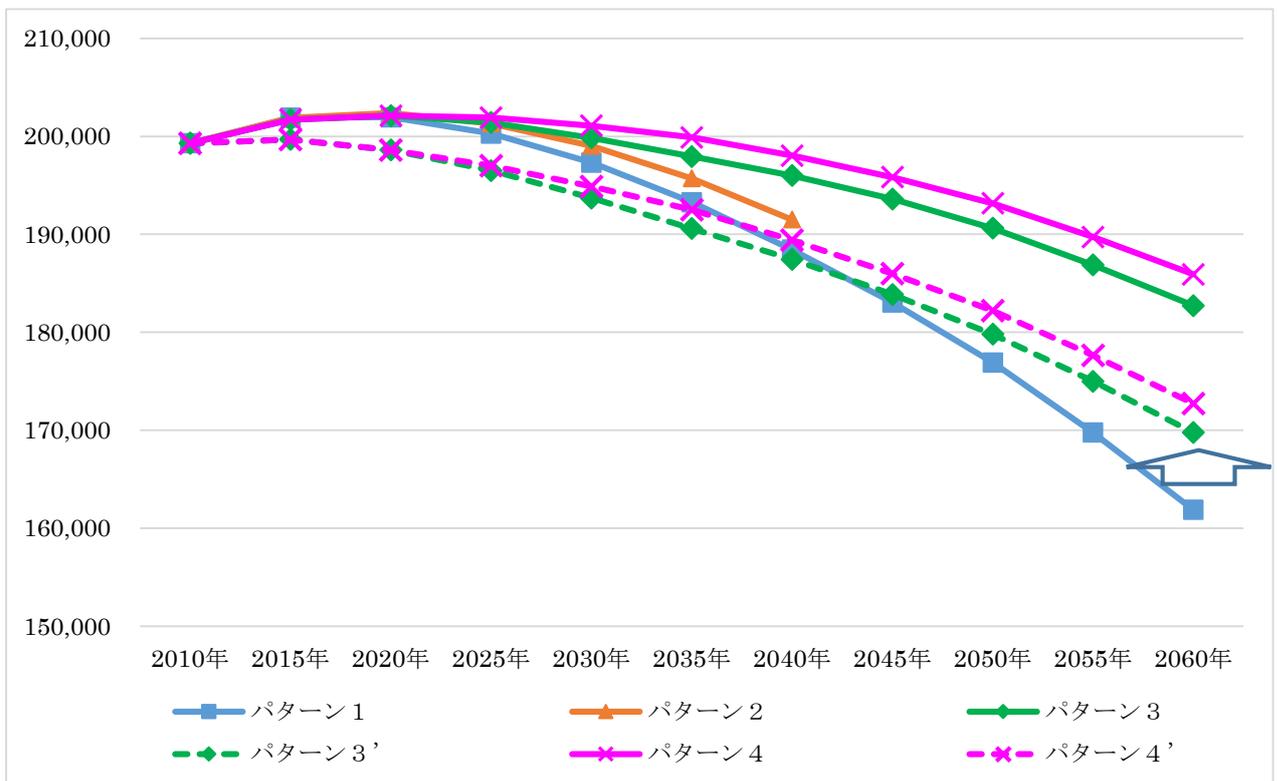
- 鈴鹿市における2010年から2060年までの将来人口の推計について、社人研の「日本の地域別将来推計人口（平成25年3月推計）」など国から提供されたデータとワークシートの活用等により、パターン別のシミュレーション結果は次の図表とおりです。

【図表 2-1】 パターン別シミュレーション条件

| 分類 | シミュレーション条件 |
|------------------|--|
| パターン1 【ベース推計】 | 全国の移動率が、今後一定程度縮小すると仮定した推計（社人研推計準拠） |
| パターン2 | 全国の総移動数が、2010（平成22）～2015（平成27）年の推計値と概ね同水準でそれ以降も推移すると仮定した推計（日本創成会議推計準拠） |
| パターン3 | パターン1をベースに「合計特殊出生率」を国が長期的な見通しで仮定値とした「2020（平成32）年には1.6、2030（平成42）年に1.8程度、2040（平成52）年に人口置換水準（約2.1）」を適用した推計 |
| パターン3' | パターン3をベースにし、人口移動がゼロ（転入者数＝転出者数）と仮定した推計 |
| パターン4 | パターン1をベースに「合計特殊出生率」を三重県「希望がかなうみえ 子どもスマイルプラン」の総合目標を前提に「2025（平成37）年には1.8、2035（平成47）年に人口置換水準（約2.1）」を適用した推計 |
| パターン4' | パターン4をベースにし、人口移動がゼロ（転入者数＝転出者数）と仮定した推計 |

【図表 2-2】

(人) 鈴鹿市の将来人口のベース集計とシミュレーション結果



※【図表 2-1】パターン別シミュレーション条件から作成

【図表 2-3】

将来人口シミュレーション結果別の人口構造

| | | 総人口 | 年少人口 (0-14歳人口) | 生産年齢人口 (15-64歳人口) | 老年人口 (65歳以上人口) | |
|------------------|--------|---------|-------------------|----------------------|-------------------|--------|
| | | | | | うち75歳以上人口 | |
| 2010 (平成22)年 | 現状値 | 199,294 | 30,557 | 129,578 | 39,159 | 17,603 |
| 2020年 (平成32)年 | パターン1 | 201,946 | 27,111 | 123,459 | 51,376 | 25,345 |
| | パターン2 | 202,371 | 27,126 | 123,760 | 51,485 | 25,384 |
| | パターン3 | 202,106 | 27,271 | 123,459 | 51,376 | 25,345 |
| | パターン3' | 198,608 | 27,077 | 121,362 | 50,169 | 24,593 |
| | パターン4 | 202,106 | 27,271 | 123,459 | 51,376 | 25,345 |
| | パターン4' | 198,608 | 27,077 | 121,362 | 50,169 | 24,593 |
| 2030年 (平成42)年 | パターン1 | 197,329 | 23,182 | 118,836 | 55,311 | 32,818 |
| | パターン2 | 199,033 | 23,316 | 120,022 | 55,694 | 33,036 |
| | パターン3 | 199,848 | 25,885 | 118,652 | 55,311 | 32,818 |
| | パターン3' | 193,698 | 25,296 | 114,871 | 53,531 | 31,529 |
| | パターン4 | 201,079 | 27,116 | 118,652 | 55,311 | 32,818 |
| | パターン4' | 194,895 | 26,494 | 114,871 | 53,531 | 31,529 |
| 2040年 (平成52)年 | パターン1 | 188,446 | 21,726 | 104,254 | 62,467 | 33,339 |
| | パターン2 | 191,500 | 22,038 | 106,384 | 63,078 | 33,673 |
| | パターン3 | 196,011 | 28,159 | 105,385 | 62,467 | 33,339 |
| | パターン3' | 187,444 | 27,069 | 100,103 | 60,271 | 31,773 |
| | パターン4 | 198,044 | 29,686 | 105,891 | 62,467 | 33,339 |
| | パターン4' | 189,408 | 28,544 | 100,593 | 60,271 | 31,773 |
| 2050年 (平成62)年 | パターン1 | 176,925 | 19,982 | 94,819 | 62,124 | 39,088 |
| | パターン2 | | | | | |
| | パターン3 | 190,630 | 28,916 | 99,590 | 62,124 | 39,088 |
| | パターン3' | 179,805 | 27,494 | 92,643 | 59,669 | 37,212 |
| | パターン4 | 193,165 | 29,441 | 101,599 | 62,124 | 39,088 |
| | パターン4' | 182,199 | 27,998 | 94,533 | 59,669 | 37,212 |
| 2060年 (平成72)年 | パターン1 | 161,882 | 17,395 | 87,982 | 56,505 | 36,798 |
| | パターン2 | | | | | |
| | パターン3 | 182,718 | 27,328 | 98,886 | 56,505 | 36,798 |
| | パターン3' | 169,778 | 25,740 | 90,873 | 53,165 | 34,882 |
| | パターン4 | 185,924 | 28,203 | 101,216 | 56,505 | 36,798 |
| | パターン4' | 172,723 | 26,562 | 92,996 | 53,165 | 34,882 |

※【図表 2-2】 鈴鹿市の将来人口のベース集計とシミュレーション結果を基に作成

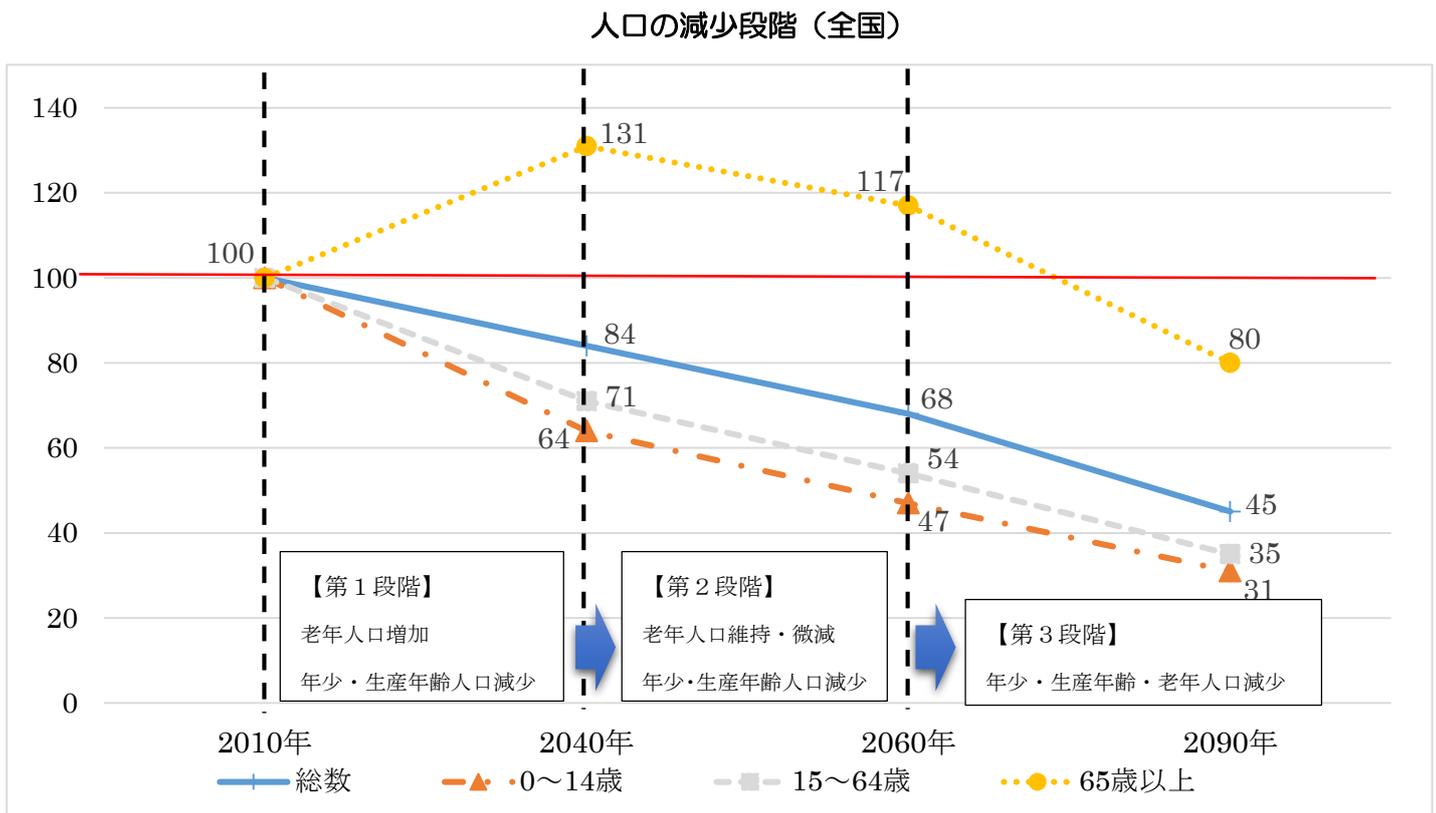
- パターン1とパターン2による2040年の総人口は、それぞれ約18.8万人、約19.2万人で、約3千人の差が生じており、パターン1では人口減少が一層進む見通しとなっている。
- パターン3とパターン4による2060年の総人口は、それぞれ人口移動をゼロ（転入者数＝転出者数）と仮定したパターン3'とパターン4'と比べると約1.3万人多い推計となっている。
- パターン1では、2060年の人口は2010年の人口に比べ約20%減少する。その減少率をパターン3では約8%、パターン3'では約15%、パターン4では約7%、パターン4'では約13%に抑えられる。

(2) 人口減少段階の分析

○ 「人口減少段階」は、一般的に、「第1段階：老年人口の増加（総人口の減少）」「第2段階：老年人口の維持・微減」「第3段階：老年人口の減少」の3つの段階を経て進行するとされており、全国における2010年の人口を基準に2040年、2060年、2090年の人口減少段階を見たのが【図表 2-4】のグラフです。

また、三重県及び鈴鹿市における2010年の人口を基準に2040年の人口減少段階を見たのが【図表 2-5】【図表 2-6】の表です。

【図表 2-4】



※社人研「日本の将来推計人口（平成24年1月推計）」から作成

※2010年の人口を100として、各年の人口を指数化している。

【図表 2-5】

人口の減少段階（三重県）

| 区分 | 2010年 (千人) | 2040年 (千人) | 2010年を100とした 場合の2040年の指数 | 人口減少 段階 |
|--------|---------------|---------------|-----------------------------|------------|
| 老年人口 | 450 | 542 | 120 | 1 |
| 生産年齢人口 | 1,151 | 807 | 70 | |
| 年少人口 | 253 | 158 | 62 | |

※2010年、2040年の3区分人口は、社人研「日本の将来推計人口」から抜粋

【図表 2-6】

人口の減少段階（鈴鹿市）

| シミュレーションパターン | 区分 | 2010年 (人) | 2040年 (人) | 2010年を100とした場合の2040年の指数 | 人口減少段階 |
|--------------|--------|--------------|--------------|-------------------------|--------|
| パターン1 | 老年人口 | 39,159 | 62,467 | 160 | 1 |
| | 生産年齢人口 | 129,578 | 104,254 | 80 | |
| | 年少人口 | 30,557 | 21,726 | 71 | |
| パターン2 | 老年人口 | 39,159 | 63,078 | 161 | 1 |
| | 生産年齢人口 | 129,578 | 106,384 | 82 | |
| | 年少人口 | 30,557 | 22,038 | 72 | |
| パターン3 | 老年人口 | 39,159 | 62,467 | 160 | 1 |
| | 生産年齢人口 | 129,578 | 105,385 | 81 | |
| | 年少人口 | 30,557 | 28,159 | 92 | |
| パターン3' | 老年人口 | 39,159 | 60,271 | 154 | 1 |
| | 生産年齢人口 | 129,578 | 100,103 | 77 | |
| | 年少人口 | 30,557 | 27,069 | 89 | |
| パターン4 | 老年人口 | 39,159 | 62,467 | 160 | 1 |
| | 生産年齢人口 | 129,578 | 105,891 | 82 | |
| | 年少人口 | 30,557 | 29,686 | 97 | |
| パターン4' | 老年人口 | 39,159 | 60,271 | 154 | 1 |
| | 生産年齢人口 | 129,578 | 100,593 | 78 | |
| | 年少人口 | 30,557 | 28,544 | 93 | |

※【図表 2-3】将来人口シミュレーション結果別の人口構造から一部抜粋

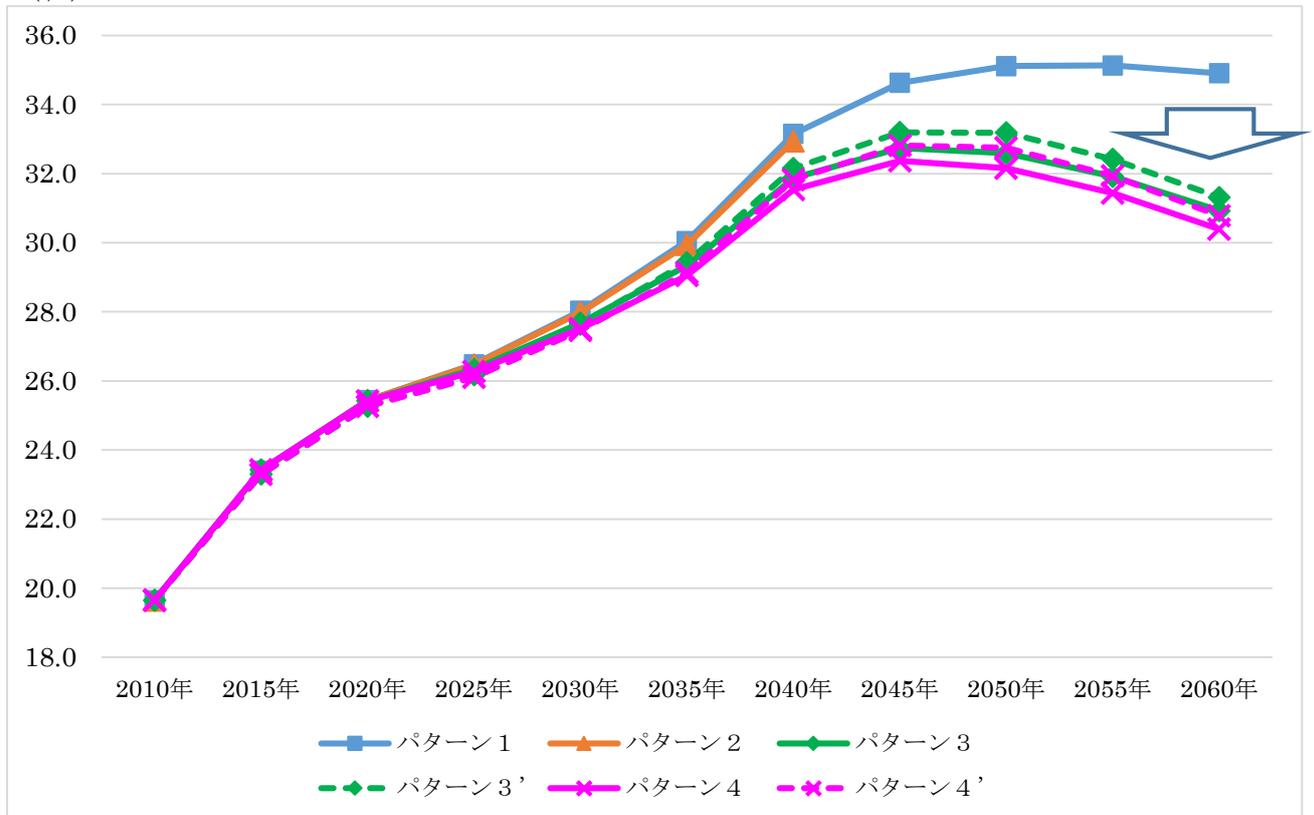
- 2010年の人口を基準に2040年の人口減少段階では、三重県及び鈴鹿市のいずれのシミュレーションパターンにおいても「第1段階」に該当している。
- 鈴鹿市においては、パターン1・パターン2では老年人口が約6割増加する一方、生産年齢人口が約2割、年少人口が約3割減少する結果となっている。
- 人口移動をゼロ（転入者数＝転出者数）と仮定したパターン3' とパターン4' では、それぞれ、パターン3とパターン4と比べると、いずれの年齢区分においても減少する結果となっており、鈴鹿市では人口移動があった場合に社会増に寄与する傾向が高い。

(3) パターン別の将来老年人口比率

○ 各パターンの2060年までの老年人口比率の推移を見たのが次の図表です。

【図表 2-7】

(%) 鈴鹿市の将来老年人口比率のベース集計とシミュレーション結果



※【図表 2-3】 将来人口シミュレーション結果別の人口構造を基に作成

【図表 2-8】

将来人口シミュレーション結果別の人口構造と老年人口比率

| | | 2010年 | 2015年 | 2020年 | 2025年 | 2030年 | 2035年 | 2040年 | 2045年 | 2050年 | 2055年 | 2060年 |
|--------|-----------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|
| パターン1 | 総人口 | 199,294 | 201,895 | 201,946 | 200,293 | 197,329 | 193,282 | 188,446 | 183,044 | 176,925 | 169,779 | 161,882 |
| | 老年人口比率(%) | 19.6 | 23.4 | 25.4 | 26.5 | 28.0 | 30.0 | 33.1 | 34.6 | 35.1 | 35.1 | 34.9 |
| パターン2 | 総人口 | 199,294 | 201,895 | 202,371 | 201,320 | 199,033 | 195,707 | 191,500 | | | | |
| | 老年人口比率(%) | 19.6 | 23.4 | 25.4 | 26.5 | 28.0 | 29.9 | 32.9 | | | | |
| パターン3 | 総人口 | 199,294 | 201,712 | 202,106 | 201,417 | 199,848 | 197,935 | 196,011 | 193,612 | 190,630 | 186,873 | 182,718 |
| | 老年人口比率(%) | 19.6 | 23.4 | 25.4 | 26.3 | 27.7 | 29.3 | 31.9 | 32.7 | 32.6 | 31.9 | 30.9 |
| パターン3' | 総人口 | 199,294 | 199,680 | 198,608 | 196,514 | 193,698 | 190,601 | 187,444 | 183,863 | 179,805 | 174,997 | 169,778 |
| | 老年人口比率(%) | 19.6 | 23.3 | 25.3 | 26.2 | 27.6 | 29.4 | 32.2 | 33.2 | 33.2 | 32.4 | 31.3 |
| パターン4 | 総人口 | 199,294 | 201,712 | 202,106 | 201,919 | 201,079 | 199,891 | 198,044 | 195,837 | 193,165 | 189,732 | 185,924 |
| | 老年人口比率(%) | 19.6 | 23.4 | 25.4 | 26.3 | 27.5 | 29.1 | 31.5 | 32.4 | 32.2 | 31.4 | 30.4 |
| パターン4' | 総人口 | 199,294 | 199,680 | 198,608 | 197,004 | 194,895 | 192,495 | 189,408 | 185,996 | 182,199 | 177,655 | 172,723 |
| | 老年人口比率(%) | 19.6 | 23.3 | 25.3 | 26.1 | 27.5 | 29.1 | 31.8 | 32.8 | 32.7 | 31.9 | 30.8 |

※【図表 2-7】 鈴鹿市の将来老年人口比率のベース集計とシミュレーション結果を基に作成

- パターン1では、老年人口比率が2010年には19.6%だったものが、2060年には34.9%と約15%上昇する推計となっている。
- その上昇をパターン3では11%、パターン3'では約12%、パターン4では約11%、パターン4'では約11%に抑えられる。